



ありあけ

佐賀大学農学部
同窓会報

No.31

発行日 2023年1月1日
編集 会報編集委員会

発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dousoukai@sadai.jp
ホームページ http://sadai.jp/alumni/nougakudousoukai/

目次

巻頭言

佐賀県農業振興のエンジン 佐賀県農業試験研究センター —新品種・新技術の開発！これまでも、そしてこれからも— 鍵山 勝一 … 1

同窓会活動

同窓生と農学部学生との交流会 … 8
農学部と農学部同窓会との意見交換会 … 9

農学部情報

学生への就職支援と最近の進路先傾向
古藤田信博 准教授 … 10

研究室紹介 その⑨
農学部附属アグリ創生教育研究センター
生物科学コース 動物行動管理学分野
江原 史雄 准教授 … 11

インターンシップ体験記 石本 侑梨 … 13
日名田祐希 … 13
吉良真実子 … 14
野中 椋太 … 14
岩下 滯 … 15
高木 紗葉 … 15

インターンシップ生受入先輩からのメッセージ
井上 賢二 … 15
成富 毅誌 … 16

光富勝先生を偲んで

高木 胖 先生 … 17
田中 欽二 先生 … 18
有馬 進 先生 … 18
白武 義治 先生 … 19
田中 宗浩 先生 … 20
田邊 俊朗 … 21
平野 勝紹 … 22
山崎 智美 … 24

若手OB・OGからのメッセージ

山崎 智美 … 25

会員の広場

入江 裕章 … 26
松尾 和敏 … 28
江口 浩喜 … 30

支部だより

佐賀県庁支部 田代 浩幸 … 32
佐賀県教職員支部 江島 博文 … 33

同窓会からのお知らせ

会費対策担当からのお願いです … 33

編集後記

… 35

協賛広告

… 35

巻頭言



佐賀県農業振興のエンジン 佐賀県農業試験研究センター —新品種・新技術の開発！これまでも、そしてこれからも—

佐賀県農業試験研究センター 所長 鍵山 勝一
(S61卒 農学・作物)

新年あけましておめでとうございます。

私は昭和57年に佐賀大学農学部に入學し4年間の大学生活を送りました。「生物研究会」というサークルにはいり、現在、佐賀大学のリージョナル・イノベーションセンターで農学部招聘教授として活躍されている平山伸さん、宮崎大学で農学部長として活躍されている國武久登さんをはじめとした元氣

なメンバーと一緒に有明海で渡り鳥の観察や山登り、そしてコンパに明け暮れた日々を思い出します。

3年生からは農学科作物学研究室で、田中典幸元農学部長、窪田文武助教授、有馬進元農学部長のもと、稲の根をほり(腰が痛くなるたいへんな作業だったことを思い出します…)、その分析・研究を行いました。その過程で、植物の生長の根源は根の活力

次第ということを知りました。

そのせいか、相田みつをさんの詩「花を支える枝 枝を支える幹 幹を支える根 根はみえねんだなあ」は好きな言葉のひとつとなりました。

卒業後、昭和61年度に佐賀県庁に農政職として入庁し、いろんな農業振興施策の立案や推進に携わってきまして、最後の職場は農業試験研究センターとなりました。

参考までに佐賀大学農学部卒業でこの農業試験研究センター所長を担われた先輩方は以下のとおりです（平成以降）。プレッシャーを感じますね（笑）。

代	氏名	期間	
43代	鍵山 勝一	R2.4～	S61卒 農学・作物
40代	松尾 孝則	H24.4～H27.3	S52卒 農学・病理
39代	福島 末行	H21.4～H24.3	S50卒 園芸・果樹
38代	内海 修一	H20.4～H21.3	S47卒 農学・農経 (大学院・農学)
37代	川崎 重洋	H19.4～H20.3	S46卒 農学・作物
35代	徳永 和彦	H15.4～H17.3	S44卒 農学・園芸
33代	横尾 達夫	H11.4～H14.3	S40卒 農学・農経
32代	中牟田拓史	H9.4～H11.3	S37卒 農学・園芸
31代	中島 康英	H4.4～H9.3	S35卒 農学・育種

資料1 佐賀県農業試験研究センターにおける佐賀大学農学部卒業生の歴代所長

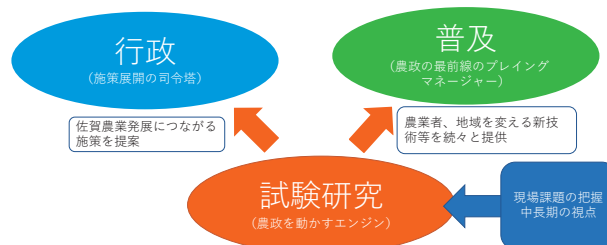
さて、この資料「全国に誇る佐賀の農産物」は、佐賀県の農業の概要をいろんな人に紹介するときにご利用しているものです。



資料2 全国に誇る佐賀の農産物

いかがでしょうか。佐賀農業の発展は試験研究の成果がベースであることをご理解いただけたと思います。

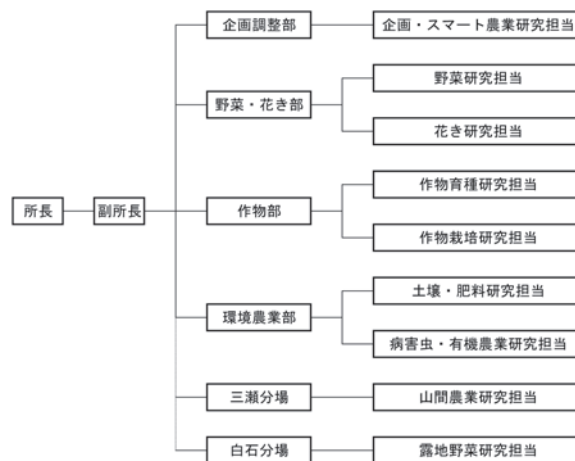
佐賀大学の学生の皆さんが、ここ農業試験研究センターをはじめ佐賀県庁にインターン研修に来ていただいています。私は学生のみなさんや若い研究員に対し、佐賀県入庁へのエールとして「試験研究は農政を動かすエンジン」と説明しています。



資料3 試験研究は農政を動かすエンジン

この「エンジン」である農業試験研究センター本場の体制は以下のとおり4つの部と2つの分場から成り立っています。現在、各部の部長すべてが佐賀大学農学部卒の皆さんです。佐賀大学の卒業生が佐賀県農業振興方策のかじ取りを担っているといっても過言ではありません。

今後も佐賀大学農学部で学んだ卒業生が続々と佐賀県庁に入庁し、佐賀県政、佐賀農政をリードしていくことを期待しています。



資料4 佐賀県農業試験研究センター組織図

では、各部と各分場の試験研究の取組を紹介します。

【企画調整部】

副所長兼部長

石橋 泰之 (S60卒 農学・病理)

企画・スマート農業研究担当 係長

松枝 隆幸 (H2卒 農学・育種)



佐賀県農業試験研究センター全景

谷口 宏樹 (H4 卒 生生・作物)

企画・スマート農業研究担当 技師

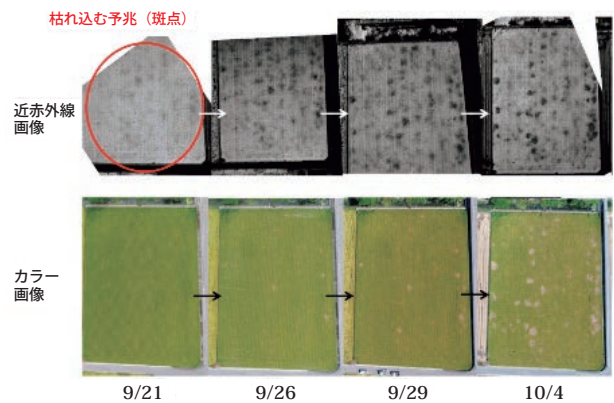
伊藤 僚汰 (H29 卒 応生・熱作)

企画・スマート農業研究担当では、スマート農業に関する技術を品目横断的に取り組んでいます。

「ICT等の利用による土地利用型作物の省力化技術の開発と実証」(H28～R2)では、水稻の播種作業において防除用ドローンを使った湛水直播をすることによって、主要作業時間が慣行の20分の1程度と、大幅な省力化を図ることができることを明らかにしました。

また、ドローンを用いた空撮において、マルチスペクトルカメラは水稻や大豆の品種間差や病虫害の発生予察に利用でき、近赤外線画像を用いると水稻のトビイロウンカ被害をより早期に発見できることを明らかにしました。さらに、法面の傾斜角度40°程度を上限として、リモコン式自走草刈機が中山間地における畦畔除草に有効であることを実証しています。

「スマート農業の一貫体系による大規模水田農業の実証事業」(R1～R4)では、白石町の農事組合法人の12haの水田において自動走行(ロボット)トラクタ、直進アシスト田植機、圃場水管理システム、ドローン防除による作業時間の削減効果の確認や収穫コンバインを品質・収量管理に活用するための現地実証試験に取り組みました。その結果、特に除草、かん排水管理、防除において大幅な労働時間の削減



マルチスペクトルカメラによるウンカ被害の早期発見

効果を確認しています。

企画部門においては予算や研究課題の取りまとめ、県内5場所の農業系試験研究成果の取りまとめや、九州・全国の研究機関と研究の推進方向や課題の整理を行うとともに、研究員の研修について調整を行っています。

また、施設園芸部門で環境制御技術の導入が進む中、収集した環境データならびに生育データを用いて、今後の管理方法等の見える化技術のシステム作りに取り組み始めたところです。今後、生産者のハウス管理やJA技術員、農業振興センター職員の生産指導に役立てていただく予定です。

さらに、研究効率化および業務改善のため、研究に取り組む職員誰もが経験を問わずにスムーズに試験設計、データ処理、圃場や資材管理、参考文献検索等を行えるようなシステム化についても、県庁農



ロボットトラクタとの協調作業による耕起作業

林水産部内の8つの試験場と連携して取り組みを始めたところであり、より高度な研究および成果の発信につなげていこうとしています。令和4年から本格的に始めた年代別、階層別の研修や知財、研究倫理、統計などの資質向上のための研修体制についても充実を図っていく予定です。

【野菜・花き部】

部長

中島 寿亀 (S62卒 園芸・蔬菜)

野菜研究担当 特別研究員

光武 美和 (H19卒 生生・地資)

野菜研究担当 技師

石橋 瑠可子 (R2卒 生物・植ウ (R4院卒))

花き研究担当 技師

米倉 翔太 (H30卒 生生・アグ保 (R2院卒))

松崎 颯大 (R4卒 応生・熱作)

佐賀県園芸の主力品目である野菜（イチゴ、キュウリ、アスパラガス、ナス）と花き（キク、ホオズキ、シンテッポウユリ）において、新品種や栽培技術を開発するために3つの研究担当で試験研究に取り組んでいます。

1 野菜研究担当（育種）

野菜の新品種開発に取り組んでいます。イチゴでは平成30年に「佐賀i9号」を品種登録し、「いちごさん」の商標で佐賀県独自ブランドとして普及が進んでいます。現在県内の作付面積の95%まで拡大したことで、県全体のイチゴ収量が以前より20%増加し、1戸の販売額が5千万円を超えるような農家も出ています。

また、施設ナスでは着果処理を必要とせずヘタにとげがない品種が現在主流となっています。そこで、このような品種と同等の特性を持ち、収量が30～



イチゴのエース品種「いちごさん」



開発中のナス新品種

50%多い品種の開発に取り組んでいます。現在、関係機関やJAとともに生産者の圃場で選抜試験を行っており、早期の品種化を目指しています。

2 野菜研究担当（栽培）

野菜の高収量・高品質化を目指した栽培技術の開発に取り組んでいます。イチゴでは「いちごさん」のさらなるブランド力強化のために、年内収量の向上、奇形果の発生抑制、輸送性の向上などの対策技術の開発に取り組んでいます。

また、キュウリでは大規模経営のための地上部および地下部の環境制御技術、省力型の仕立て方や植え替え技術について研究しています。

さらにアスパラガスでは近年の地球温暖化に伴う夏期高温や秋冬期低温対策として散水送風装置を開発しました。本技術は令和2年に技術特許を取得し、現在県内普及を目指して商品化に向けた共同研究を行っています。

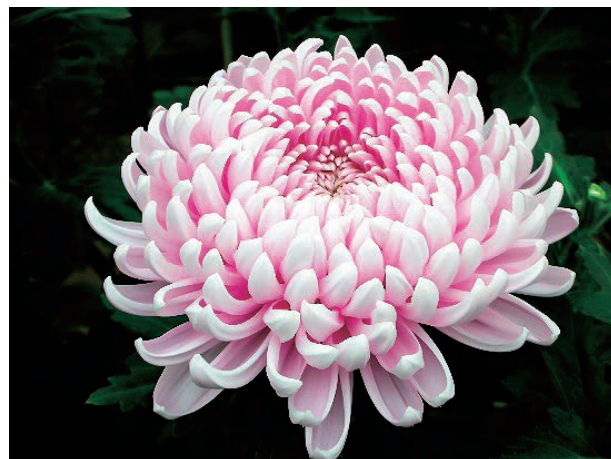
3 花き研究担当

花きの新品種と栽培技術の開発に取り組んでいます。品種開発では、淡桃色の輪ギク品種「佐賀RK1号」や、実付の良いホオズキ品種「佐賀H5号」を開発し、県内農家に普及しています。現在は低温開花性の輪ギクや高温でも開花遅延や奇形が発生しにくい小菊などの有望系統を育成しています。

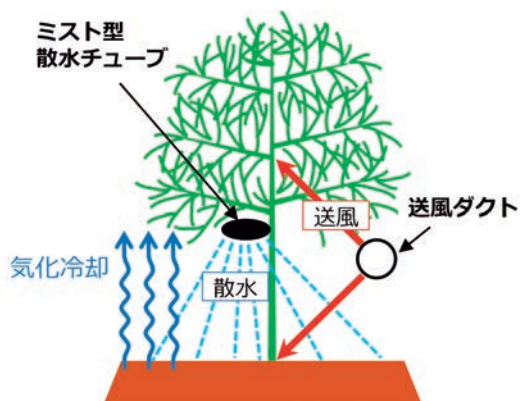
一方、栽培技術では輪ギクの炭酸ガス施用による



環境制御技術を駆使したキュウリ溶液栽培



淡桃色の輪ギク品種「佐賀RK1号」



アスパラガス栽培での散水送風装置のイメージ



実付の良いホオズキ品種「佐賀H5号」

増収技術，シンテツポウユリの作期拡大技術や機械化技術の開発に関係機関と協力しながら取り組んでいます。

【作物部】

部長

三原 実 (S63 卒 農学・作物 (H2 院卒))

作物育種研究担当 係長

森 則子 (H14 卒 生生・海浜 (H16 院卒))

作物育種研究担当 主査

広田 雄二 (S58 卒 農学・熱作 (S60 院卒))

作物育種研究担当 技師

本多 優志 (R2 卒 応生・熱作)

藤浦 淳次 (R4 卒 応生・植遺)

作物栽培研究担当 特別研究員

岩城 雄飛 (H17 卒 生生・作物 (H19 院卒))

作物栽培研究担当 技師

田村 直樹 (H26 卒 生環・生環 (H28 院卒))

作物育種研究担当と作物栽培研究担当の2つの担当で，水稻，麦類，および大豆の品種育成と栽培技

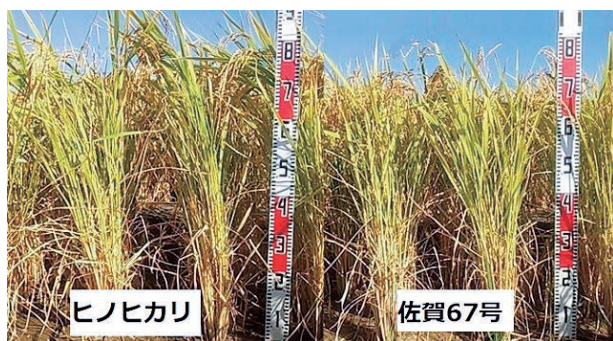
術に関する研究を実施しています。

これまでに育成した品種には，水稻「夢しずく」や「さがびより」があり，佐賀県の食用うるち米の5割以上を占める作付面積となっており，食味も「特A」など高い評価をいただいています。

現在，病害虫抵抗性を備えた良食味多収品種の開発を進めているほか，業務用の需要に応えるべく，ドローンを使った直播栽培など低コスト生産技術の開発を行なっています。

麦では，ふっくらとした柔らかいパンができるカナダ産小麦に引けを取らない品種「はる風ふわり」を農研機構と共同で開発し，普及に取り組みました。同じく共同開発のフランスパン用品種「さちかおり」とともに面積をのばしており，佐賀県はパン小麦産地としての地位を築いています。栽培技術の開発では，収量・品質向上のため，気象条件や生育に対応した施肥管理技術の開発を進めており，慣行比150%の多収を実現しつつあります。

佐賀県の大豆は「フクユタカ」が長年栽培されてきましたが，台風などの強風によって倒伏しやすく，収量が伸び悩んでいます。そこで，短茎で倒伏しに



くい新しい品種の育成を進めています。また、播種時期が梅雨の時期であるため、降雨直後でも播種作業が可能な不耕起播種技術やうね立て後播種技術の開発を行なっています。

現在、作物部は7名の研究員のうち6名が佐賀大学農学部出身で、「夢しずく」や「さがびより」の開発においても学部先輩の広田雄二（S58卒 農学・熱作（S60院卒））さんや松雪セツ子（S44卒 農学・保護）さんが陣頭指揮にあたられました。

【環境農業部】

部長

稲田 稔（H元卒 農学・病理）

土壤・肥料研究担当 係長

陣内 宏亮（H元卒 農学・病理）

土壤・肥料研究担当 特別研究員

國枝 栄二（S62卒 農化・醗酵）

土壤・肥料研究担当 主査

吉浦 純孝（S56卒 農学・育種）

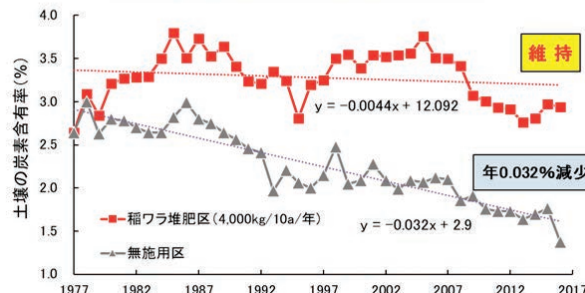
病害虫・有機農業研究担当 主査

成富 毅誌（H22卒 応生・植病（H24院卒））

土壤・肥料研究担当と病害虫・有機農業研究担当で品目横断的に環境保全型農業、病害虫防除等に関する研究を行っています。



稲ワラ堆肥と施用水田



有機物施用による水田の炭素含有維持効果

1 土壤・肥料研究担当

各種作物の生産性向上のための、肥料の効果的施用技術、土壤管理技術の開発、現地普及を行っています。最近の研究成果のトピックスとしては「有機物施用による土壤改良効果の確認」があります。

土の中の有機物は土壤を柔らかくし、肥料養分を作物に供給する働きがあります。しかし、温暖化の影響などによって、近年、その含有量は減少傾向で、作物の生産性低下の一要因とされています。

土壤・肥料研究担当では40年間にわたり同一圃場に有機物（稲ワラ堆肥）施用を行い、土壤の変化を調査しました。その結果、よい土の指標となる土壤炭素量は「無施用区」では半減したのに対して、「稲ワラ堆肥 4t/10a 施用区」では当初の量が維持され、土壤の管理上、有機物施用の重要性が確認されました。

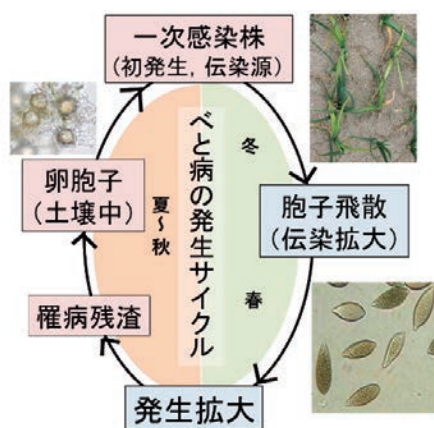
これらの結果を基に「地力」維持のための稲・麦わら、堆肥のすき込みを生産者へ呼びかけています。

今後の取り組みとして、肥料価格の高騰に対応するための作物の生育や気象条件に応じた効率的な施肥技術の確立や、家畜ふんなどを原料とした堆肥の利用による低コストな施肥体系の確立を目指していきます。

2 病害虫・有機農業研究担当

各種作物の安定生産のための病害虫防除技術、有機農業技術の開発、現地普及を行っています。

最近の研究成果のトピックスとしては「タマネギべと病の防除技術の開発と普及」が特筆すべきもの



タマネギべと病の発生生態解明

です。全国的に報道された H28 年産での甚大な被害を受け、H28 年～R 元年に佐賀大学、(独) 農業研究機構などと効果的な防除対策を確立するための共同研究に取り組みました。その結果、「病原菌の発生生態の解明」、「薬剤および圃場の夏季湛水による防除技術」や「気象予報に基づく伝染推定モデル」を確立しました。これらの成果は現地で広く普及しており、現地での被害抑制に貢献しています。現在、更なる効果的防除対策の確立を目指して、生物的防除やタマネギ自身の抵抗性を高めるための技術開発を行っています。

今後の取り組みとして、生産現場で問題となっている水稲のトビイロウンカ、ムギ類赤かび病、イチゴ炭疽病、キュウリのネコブセンチュウなどに対し、発生生態の解明とともに環境負荷を軽減した減化学農業による効果的な防除技術の確立を目指していきます。

【三瀬分場】

山間農業研究担当 係長

手塚 敏輔 (H4 卒 応生・資利)

山間農業研究担当 主査

□木 文孝 (S59 卒 園芸・応動)

中山間地における稲作と野菜花きに関する研究を 2 つの研究担当で取り組んでいます。

1 山間農業研究担当 (稲作)

中山間地で普及拡大が見込まれている「にじのきらめき」の安定生産を可能とする栽培技術の確立に取り組んでいます。現在、関係機関とともに栽培のマニュアル化を図り、早期の産地化を目指しています。

2 山間農業研究担当 (畑作)

農業所得を確保できる軽量品目や省力的な栽培技術体系の確立が望まれているため、中山間地での夏秋ピーマンの早期定植作型の検討や施設整備に要する経費を抑えたトンネル栽培を利用した「いちごさん」の早期どり技術を確立し、農業産出額の向上を目指しています。また、平坦地での生産が難しい初秋どりキャベツの適品種として「藍天」を選定し、早期の産地化を図っています。



2022 年 9 月 26 日収穫の「藍天」

【白石分場】

露地野菜研究担当 係長

江頭 淳二 (H4 卒 応生・育種)

福永 正照 (H5 卒 生生・作物)

白石分場では、昭和 58 年の発足以来、干拓地での土壌管理や営農技術およびタマネギ、レンコンなどの地域特産露地野菜の生産安定と品質向上、省力的生産技術の開発に取り組んできました。現在、タマネギの直播栽培や収穫後の拾い上げと搬出作業の省力化など、担い手不足のなかで栽培面積を拡大するための技術開発を行っています。また、ブロッコリーや冬どりタマネギなどの新しい品目の省力的安定生産技術の確立に取り組んでいます。

さらに、イチゴでは生産性向上による農家経営の安定を図るため、ウイルス等に感染していない優良種苗を生産し県内農家へ配布しており、施設野菜の安定生産にも寄与しています。



トラクタアタッチメントによるタマネギ直播

同窓会活動

同窓生と農学部学生との交流会

令和4年11月30日に同窓会館「菱の実会館」とインターネットを介して、対面参加とweb参加のハイブリッド形式による「同窓生と農学部学生との交流会」を開催しました。この交流会は在学生の就職活動支援の一環として毎年開催しているものです。今回、農学部からは田中宗浩副学部長（H4卒 生生・施設）を始めとして3名の先生方にご出席していただき、インターネット接続を含め、交流会を運営していただきました。

同窓会からは森田昭会長（S52卒 農学・農経）、鐘ヶ江直雅副会長（S56卒 農化・生化）、郡山益美副会長（H7卒 生生・浅海）、松尾信寿副会長（S63卒 園芸・果樹）と5名の就職ガイダンス講師が出席しました（うち講師1名はweb参加、その他に理事・役員7名がweb参加）。在学生の参加は対面参加6名＋web参加13名で、新型コロナウイルスの影響もありweb参加者が多くなりましたが、昨年よりも多数の参加となりました。

交流会では森田会長から「まずは学生生活を楽しんで欲しい。今日の先輩方の体験談やアドバイスを今後の就職活動に役立てて欲しい。」と在学生への激励の言葉があり、同窓会活動の紹介を含めた挨拶がありました。その後、各支部代表の5名の卒業生から、それぞれの職場の状況、現在の職業を選んだ動機、自分の経験に基づいた就職活動へのアドバイス、在学中に経験しておいて欲しい事等についての講演がありました。講演は一人10分程度と短時間ではありましたが、全講師がパワーポイントや紙面による図表や写真等を用意されており、とても分かりやすくインパクトのある講演でした。

講演の中では、

- ① 今を充実して過ごせば就職活動で自己PRする材料は自ずと生まれる
- ② 面接試験の準備は“ジョブカフェ SAGA”が役立つ
- ③ 社会（職場）ではコミュニケーション力や人脈づくりが最も重要になる

など、経験者ならではの迫力ある体験談をユーモアも交えながら熱く語っていただき、在学生も熱心に聞き入られていました。

農学部では講義の一貫としてキャリア教育が行われており、在校生は様々な業界の採用情報や業



務内容等をご存じとのこと。しかし、今回の交流会では通常の講義では知り得ない現場の生の声を先輩方から聞くことができ、今後の就職活動への大きな励みになったことと思います。

以下に講師の皆様をご紹介します（敬称略）。また、講師の皆様、並びに講師の選出等でご協力いただきました関係支部長様に紙面をお借りし、厚くお礼申し上げます。

- ・佐賀県庁支部：佐賀県農地整備課 古賀優希（R4卒 生環・食環）
- ・佐賀県庁支部：佐賀県藤津農業振興センター普及課 岩井加奈絵（H24卒 生環・作物）
- ・佐賀県教職員支部：佐賀県立唐津南高等学校 江島博文（S62卒 農化・食管）
- ・佐賀市役所支部：佐賀市総務法制課 西村幸大（H18卒 生生・地圏）
- ・佐賀県農協連支部：JA さが杵藤園芸センター園芸指導課 堤一礼（H25卒 応生・植病）

農学部同窓会理事長 野中 一弥
(H元卒 農化・土肥)

農学部と農学部同窓会との意見交換会

令和4年12月6日に、農学部と農学部同窓会との意見交換会を菱の実会館において開催しました。農学部からは大島一里農学部長をはじめ鈴木章弘副学部長、田中宗浩副学部長（H4卒 生生・施設）、一色司郎副学部長、石丸幹二生物科学コース長、北垣浩志食資源環境科学コース長、濱洋一郎生命機能科学コース長、藤村美穂国際・地域マネジメントコース長、谷口圭介事務局長の9名にご参加いただきました。同窓会からは森田昭会長（S52卒 農学・農経）、鐘ヶ江直雅副会長（S56卒 農化・生化）、郡山益美副会長（H7卒 生生・浅海）、松尾信寿副会長（S63卒 園芸・果樹）、田代暢哉理事（S54卒 農学・病理）、佐賀県教職員支部 江島博文支部長（S62卒 農化・食管）、農業自営者の会 末次博幸支部長（S54卒 農学・作物）、佐賀県支部 服部二郎支部長（S50卒 農土・土改）の8名が出席しました。

意見交換会では、森田会長から「大学と同窓会の協力・支援体制をさらに深めるため、この場を有意義な情報共有の場にしたい」と挨拶がありました。続いて、大島農学部長が農学部の新たな研究・教育の取り組みを紹介され、「地域に根差した大学として持続的に前進していくために農学部の強みと特徴を生かした研究・教育に取り組んでいく」と述べられました。

続いて副学部長および各コース長から学生の就職状況、改組後の学生教育の工夫、さらに研究評価や研究費確保、地域連携の強化など様々な点から貴重な情報ならびに意見をいただきました。学生の就職率については製造業や農林業関係を中心に、ほぼ100%で非常に高いことや、社会で即戦力となる学生の育成に向けた取り組みなどが紹介されました。また、研究面では財政的な厳しさは年々増している状況にあるものの、地域課題に対応した重点プロジェクト研究も進めており、より一層の地域社会との連携強化を図るうえでも同窓

会の支援をお願いしたいとの話がありました。

その後の意見交換では、それぞれの立場から活発な要望が出され、今後の連携強化につながる有意義な意見交換ができました。農学部からは、さらに地域貢献を目指した研究活動を進めるうえで、より一層の同窓会からの支援をお願いされたところです。主な要望内容は以下のとおりです。

農学部から同窓会への主な要望事項

- ・卒業生との継続的な連絡体制構築を目的とした同窓会との連携
- ・在校生の海外研修に対する支援制度の新設
- ・職業指導講師の推薦 等

同窓会から農学部への主な要望事項

- ・農業や理科分野の教職員を目指す学生確保への協力
- ・JA、県庁の新規採用者確保に向けた在学生のインターンシップ実施等の連携強化
- ・農業分野での新技術導入を加速するための現場圃場の活用
- ・佐賀県の魅力アップに活用できる研究成果等のアイデア提供

同窓会では意見交換会の結果を受け、在学生への支援強化のため、以下の支援制度を新設することで検討を進めており、次回の総会で会員の皆様に報告、提案させていただく予定としています。

- ①「食農基礎技術マスタリー特別教育プログラムに係る支援制度」：学生のインターンシップ活動やマルシェ活動に対する経費を支援する
- ②「海外大学等との研究連携に係る支援制度」：学生が海外との研究連携を行う際の旅費等の経費の一部を支援する

同窓会理事長 野中 一弥
(H元卒 農化・土肥)



森田会長からの挨拶



大島農学部長からの御挨拶



意見交換の様子

農学部情報

学生への就職支援と最近の進路先傾向

生物科学コース・果樹園芸学分野
准教授 古藤田信博

昨年度から農学部就職委員を務めております、生物科学コース・果樹園芸学分野の古藤田です。

令和4年度は、原口智和先生(食資源環境科学コース・地域環境学分野)の後任である野間誠司先生(生命機能科学コース・生物資源利用学分野)との2人体制で、農学部、農学研究科および先進健康科学研究科(農学系)に所属する学生の就職支援を行っています。

農学部学生は、キャリアセンターによる全学対象の就職支援に加え、農学部後援会のご支援のもと、学部独自の「農学部就職講座」も受講できるようになっています。今年度は4月13日(水)から開始し、昨年度と同様に(株)リクルート、(株)マイナビ、ジョブカフェSAGAの3社様にご協力いただいています。コロナ禍に見舞われた令和2年度からオンライン開催となっていました。今年度はほとんどの講座を対面あるいはハイブリッドで行っています。前期は主としてインターンシップ対策、後期はエントリーシート(ES)・履歴書対策や面接対策を行いました。

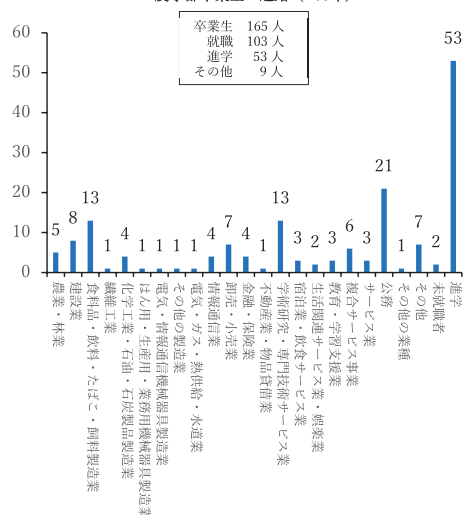
後期に行われた内定者報告会では、内定を獲得した学部学生3名、修士学生3名に登壇していただき、学生生活、研究室生活も含め、就職活動の実際について体験を語ってもらい、次年度就職活動を本格化させる後輩たちに良きアドバイスを送ってもらいました。

最近の進路先の傾向につきましては、大学院進学および公務員系が増加していることがあげられます(表参照、令和3年度の進路状況、大学院は農学研究科のみ)。昨年度は53名が修士課程に進学しており、本学農学研究科に加え令和元年の改組で新設された先進健康科学研究科にも12名が進んでいます。

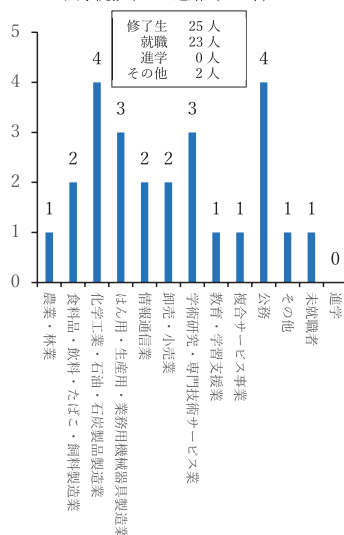
一方、この数年間は食料品・飲料等製造業への就職が減少しているようです。今年度の採用選考ではオンラインから対面での面接が復活し、昨年度よりも内定が早く出る傾向にありました。農学部・大学院では現在、94%(暫定値)の学生が進路を確定している状況です。令和5年卒の大卒求人倍率は1.5倍と上昇傾向ですので、就職活動を継続している学生は健康にも留意しつつ、諦めずに頑張ってもらいたいと思います。

令和4年度は地元民間企業のみならず、佐賀県や熊本県、長崎県などの地方公共団体や公社から本学部への就職説明会開催依頼が多かった年でした。便利なオンライン説明会の普及も一つの要因かと思えます。また、複数県の御担当者から農業高校教員の確保が難しくなっているとお声をお寄せいただきました。これらは農学部学生に対する採用意欲の高まりと受け取っています。佐賀県および熊本県の農政職に関する説明会は農学部若手OBによるオンラインあるいは対面によって昨年3月および11月にそれぞれ行われ、在学学生は熱心に情報を取得していました。令和5年度に就職活動する学生の皆さんには、気力を充実させ、しっかり準備をして就職戦線に立ち向かってもらいたいと思います。農学部OBの皆様からも、現役・卒業生の就職活動につきまして是非ともサポートいただけますと幸甚です。今後ともよろしく願い申し上げます。

農学部卒業生の進路 (R03年)



大学院修士生の進路 (R03年)



資料：「佐賀大学農学部・大学院農学研究科概要 2022」

研究室紹介 その⑬

農学部附属アグリ創生教育研究センター 生物科学 コース動物行動管理学分野 准教授：江原 史雄

佐賀大学農学部同窓会の皆様には日頃から多大なるご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

私は2014年に農学部附属アグリ創生教育研究センターの准教授として着任いたしました。本センターは2012年に佐賀大学の海浜台地生物環境研究センターと農学部附属資源循環フィールド科学教育研究センターを統合し、新センターとして誕生しました。そして開所に合わせ、新たにアグリ医療部門が立ち上がりました。その中の家畜医療応用学分野において、私の佐賀大学での教育・研究活動がスタートしました。

そこでの主なミッションは、農業と医療分野の連携による「アグリセラピー」の開発でした。「アニマルセラピー」という言葉はよく耳にするかと思えます。正確には「動物介在療法 (Animal Assisted Therapy)」と「動物介在活動 (Animal Assisted Activity)」を意味します。どちらも動物を用いることは同じですが、前者は医療行為であり、後者は学校や福祉施設などを対象にして動物とふれあうことで、心の安定やQOLの向上を目的とする活動（癒しがメイン）のことを示します。これらに参加する動物は、犬、猫などの伴侶動物が多いかと思えます。「アグリセラピー」とは、目的は同じなのですが、農業フィールド資源を活用したセラピーのことを示します。具体的には、家畜の生産現場において、ふれあいや飼育管理作業を通して、対象者の精神的、身体的健康性の向上を図るということになります。当時は、こういっ

た取り組みは珍しく、研究を進めていく際は色々と苦労しましたが、学生達が熱心に取り組んでくれたおかげで、医学部、文化教育学部との連携も上手くいき、実際の検証ができるところまで辿り着くことができました。現在、3学部が連携した「アグリセラピー」のプロジェクトは一旦終了しましたが、この中で、家畜との触れ合いが対象者の心身に良い影響を及ぼすことがわかり、人の生活において、動物が重要な存在であることを再認識することになりました。

現在は、動物行動管理学分野と名称が代わり、動物の情動に注目して研究を行っています。皆さんは、「アニマルウェルフェア (動物福祉)」という言葉聞いたことがあるでしょうか。これは、動物の身体的および精神的状態を意味するものであり、動物の立場に立って、動物の状態を理解し、その状態をより良くしていくことを目的としています。現代では、動物も感情がある生き物であり、その取り扱いには十分な配慮が必要であるとされています。そして、それは家畜も例外ではありません。ここで重要なこととして、アニマルウェルフェアでは、動物の利用は認めるという点にあります。世の中にはアニマルウェルフェアの他に、人と動物との関係に関して動物の利用を認めない動物の権利思想や、日本に古くからある動物愛護という思想があります。これらすべてが動物への配慮の思想であることは共通していますが、動物の利用という点で大きく異なります。普段あまり



生まれたばかりの仔牛への授乳、とてもかわいいです



黒毛和種の牛体洗浄の様子、牛さん、気持ちよさそうです

意識しないかもしれませんが、人が利用している動物は身の回りに沢山います。特に家畜（産業動物）の場合は、屠殺し、食糧とします。人との関わりの中で、最終的に屠殺するからといって虐待したり、劣悪な環境で飼育したりするのではなく、生きている間の状態をより良くするという考え方は重要な視点です。

さらに近年では、人と動物の環境の状態（ウェルビーイング）が密接に関係しており、相関関係にあるとする「One Welfare（ワンウェルフェア）」という考え方があります。つまり、これからの世の中は、人と動物と自然の福祉と健康性は一体であると捉えて行動することが重要であるということです。

ここで、前述のアグリセラピーの話に少し戻りますが、セラピーということを考える場合、人間からの一方的なものではなく、人と動物が存在することで、相互に良い影響を与えることが重要になります。つまり、動物が安心して（ストレスを感じていない）状態が、人にとっても安心し、ゆったりとした気持ち（癒し）を与えることができるというわけです。動物はストレスを抱えると問題行動を発現することが多いので、セラピーだけでなく、日常管理としてストレス管理は重要な課題となります。そう考えた時に、私が研究テーマとしているアニマルウェルフェアは、家畜のストレスを減らし、生活の質を上げることが目的ですので、そのように飼育された家畜が生活する空間でのセラピーは意義があるものですし、ワンウェルフェアにつながると思います。現代は身近な生活の場所に動物の存在を求めることも増えていきますので、今後、人と動物の関係はさらに変化していくと考えられます。アニマルウェルフェアについては日本ではまだまだ認知度が低いですが、間違いなく皆さんの生活に大きく関わってくるテーマです。今後、アニマルウェルフェアに関する研究が進むことで、家畜は質の高い生活状態で飼育され、それにより人は安全で質の高い食品と癒しを得ることができるようになると思います。このように、人も動物も満たされた環境を作るという新しい共生のかたちを研究していくことで、再びセラピーと融合する時がくるのではないかと考えています。

さて、最後に研究室のメンバーについて紹介します。現在は准教授1名、大学院生1名、4年生



黒毛和種（肉牛）の飼育牛舎、研究室メンバー全員で管理しています



研究室メンバー（令和4年度）、少ないながらもみんな動物好きです

2名、3年生3名と決して多くはないですが、毎年、動物好きの学生達がやってきます。一方、動物は牛、山羊、馬を飼育しており、人より動物の方が多い研究室です。学生達は家畜を対象とした卒業研究を行います。卒業生は県職員、JA、飼料会社、食品会社、農業法人などに就職しています。一部は大学院に進学し、さらに研究を続けます。また、一つ特殊な環境として、アグリ創生教育研究センターには研究室が4つあり、教員、技術職員、事務職員、各研究室に所属する学生と、それぞれ異なる立場の構成員の集合体となっています。よって、自分の専門分野だけではなく、センターの管理運営や農学全般に関する知識と技術を習得することができる場所として、貴重な存在ではないかと思っています。学生達には、それらの体験を通して、社会に出てから直面する様々なことに柔軟に対応する力を身につけてもらいたいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

インターンシップ体験記

農学部では毎年、多くの学生さんがインターンシップを体験されています。今回、参加された学生さんたちの感想と決意を掲載しました。あわせて、受け入れ先に所属している農学部卒業生からの感想とアドバイスについても載せています。同窓会ではインターンシップが円滑に実施されるような取り組みも行っています。インターンシップは会社説明会などよりもさらに現場の空気を肌で感じるができる場です。学生の皆さんの積極的な参加を期待しています。



生物科学コース 植物ウイルス病制御学分野 4年生

石本 侑梨

①インターンシップ先

私は佐賀県農業試験研究センター（病害虫・有機農業研究担当）に受け入れていただきました。

②選んだ目的

インターンシップに参加したいと考えたきっかけは、佐賀県と熊本県の農業の違いについて知りたかったからです。大学受験時に農作物の統計をみて佐賀県が農業に力を入れていることを拝見し、大学に入学しました。授業やMOT（特別プログラム）活動を通じて農家の方とお話をする機会があり、農業に対する姿勢や人柄のよさを感じ、佐賀県の農業をより深く見てみたいと考えたからです。

③期間と体験内容

2021年8月23日～9月3日の計10日間、お世話になりました。3年生の時です。

体験内容はイチゴランナーの手入れ、植物病原菌の薬剤感受性検定、有機水稻とダイズの害虫調査、タマネギ乾腐病の調査等でした。

④気づきと感想

職場の皆様から、仕事内容や仕事に対する姿勢、病気や害虫の深い部分、考え方などを教えていただき、職場の方だけでなく県民の方々の人柄や雰囲気を知ることができました。特に印象深かったのは、薬剤感受性の検定です。病原菌が農薬に対する抵抗性を獲得し、効果が低下している状況をかきまみることができました。病原菌の恐ろしさを目の当たりにし、病原菌と向き合う必要性を再確認しました。

また、佐賀県のインターンシップ後、さらに10日間、イチゴ農家でのインターンシップ活動に参加させていただきました。その際に「先日の大雨の影響で、イチゴに炭疽病が発生するかもしれない」と助言を頂いておりました。実際、インターンシップ先ではイチゴの苗が炭疽病に罹っていて、農家の方が困惑されていました。農業試験研究センターのレベルの高さに感銘いたしました。

この期間中に杵島農業改良普及センターの方々にお世話になり、「さがさいこう農業経営体育成プロジェクト先進地視察研修」に大分県まで同行させていただきました。研修先では生産物の生産だけでなく、加工や流通、地域の特色を生かした観光など集客方法について勉強になりました。

改めて県と農家の方が連携して佐賀県の農業を支えていると実感し、この1か月間は佐賀県の農業に対する強い思いを感じることができました。



生物科学コース 植物病制御学分野 4年生

日名田 祐希

私は佐賀県農業試験研究センターでインターンシップを行いました。このインターンシップ先を選んだ理由としては、公務員として農業に携わりたいという思いが強かったからです。

期間は1週間でイチゴの病害防除に関する研究のお手伝いや、イネの病害発生調査、地域の農家さんたちとの会議の見学などを体験しました。1週間のインターンシップを通して、改めて

農業における病害防除や、地域との連携の重要性を知ることができました。公務員として農業に携わることで、その地域に密接に関わり、地域特産農産物についての研究ができることの魅力を感じました。また実際に農業試験研究センターで働かれている人の雰囲気がよく、全員がその仕事にやりがいや、責任感を感じて取り組まれている様子がとても印象的でした。

私自身も将来、仕事を行う際にこのような姿勢で取り組みたいと思うと同時に、より一層公務員として農業に携わりたいという思いが高まりました。



食資源環境科学コース 浅海干潟環境学分野 4年生

吉良真実子

大学での学びを活かすことのできる建設コンサルタントについて知りたいと思い、3年次の夏季休暇のうち10日の期間、「株式会社技術開発コンサルタント」

ヘインターンに行きました。

インターンではCADによる製図や安定計算、ドローンによる空中撮影など様々な業務を体験しました。大学で得た知識を実際に使う場面が多々あり、その後の学業へのモチベーションに繋がりました。

インターンで最も印象に残ったことは、「資料作成の大変さ」です。多大な時間と労力をかけて報告資料を作成している姿を見て、私は資料作成のような日々の業務を効率化、サポートできるような職に就きたいと考えるようになりました。

インターンに参加したことで、「何のために働きたいのか」を改めて考えることができ、その後の就職活動に繋がったと感じています。



生物科学コース 植物病制御学分野 3年生

野中 椋太

私は佐賀県農業試験研究センターのインターンシップに5日間参加しました。私がインターンシップ先として農業試験センターを選んだ目的は農業に関わる研究や仕事に興味があり、どのような試験研究がされているのか、研究以外ではどのような仕事を行っているのか実際の現場を見てみたいと思ったからです。

実習の5日間は病害虫・有機農業研究担当に所属させていただき、害虫のトラップ調査、作物の病害や害虫防除に関する試験、実際に現地で行われている調査への同行など様々な仕事を体験することができました。仕事内容として試験研究はもちろんですが、病害虫の発生予察会議や病害虫診断研修などにも参加することができ、たいへん貴重な経験をさせていただきました。

今回このインターンシップに参加させていただいて、試験研究を行う上でその前の準備段階やフィールドでの作業や調査がとても重要であると感じました。この実習期間中、職員の方が話された、「農業試験研究センターでやってきた研究成果がしっかりと残り、農家の方々へ手助けができる」という言葉が特に印象に残り、業務だけでなく仕事に対する心がけや考え方も学ぶことができました。

この5日間のインターンシップで農業試験研究センターでの仕事をすべて知ることはできませんでしたが、実際に現場を見学することで試験研究以外での仕事や活動内容、働いている職員の方々のお話を生で聞くことができとても良かったです。このインターンシップの経験を活かして今後の過ごし方や就職活動に役立てていきたいと思っています。



食資源環境科学コース 浅海干潟環境学分野 3年生

岩下 澪

インターンシップ先は長崎バイオパークで、インターンシップ期間は令和4年9月20日～24日の5日間でした。インターンシップ先を選んだ理由は、将来、動物関係の仕事に就きたいと思っており、動物の自然のままの姿を見ることができ、近くで見ると触れ合えるという長崎バイオパークの魅力に惹かれたからです。

5日間のインターンシップでは主に獣舎・展示場の掃除、エサ収穫、エサやり、接客を行いました。お客さんでは見ることのできない動物園の裏側や、触れることのできない動物に接することができ、とても貴重な経験になりました。さらに、動物園が抱える問題や飼育員の方々の命に対する考え方などを知り、私の動物園や動物に対する考え方が変わりました。また、テキパキ行動、挨拶、敬語の使い方など、動物園に限らず社会に出て働く上で大切なことも学ぶことができました。

動物や飼育員の方々を観察して、自分はまだまだ知識不足だと思い知らされ、もっと勉強する必要があると痛感しました。



食資源環境科学コース 浅海干潟環境学分野 3年生

高木 紗葉

私は、あおみ建設株式会社のオンラインでの5日間のインターンシップに参加しました。授業の中で紹介されていた会社で、海での巨大な構造物をつくるという点に惹かれ応募しました。

期間中、施工管理の内容や、ケーソンというコンクリートの巨大な箱を作る様子、圧力の計算演習、またアグリビジネスへの取り組みも始まっていることを学びました。女性の技術者はまだ少ないそうです。でも、座談会では女性の技術者の方とお話ができ、楽しみながら仕事をしている様子や、福利厚生が手厚いこともわかりました。

このインターンシップに参加して、マリコン（「マリンコンストラクター」の略称で、湾港工事、護岸工事、海底トンネル工事などの海洋土木工事をメインに行う建設会社のこと）の仕事内容について知ることができ、地図に残る大きな仕事ができることはとても素敵だと思いました。



インターンシップ生受入先輩からのメッセージ



佐賀県佐賀中部農林事務所 農地整備第二課

井上 賢二 (H3卒 農士・土改)

佐賀県佐賀中部農林事務所では毎年8～9月に佐賀大学農学部生のインターンシップ生を受入れています。令和4年度は8月23～25日（第1組）に4名、9

月12～16日（第2組）に1名の受入れを行いました。

内容は、まず事務所において体験や視察する現場の概要説明を行い、その後現場に出向き、実際に見て体験して質疑応答をするといったところです。今年度は、水田のほ場整備やかんがい排水、クリーク整備事業等の現場でした。場所によっては我々が実際に業務で行っている測定確認を体験していただきました。最終日には、佐大OBの若手先輩職員とのざっくばらんな座談会を行いました。学生さんからはインターンシップの感想や、佐賀県庁を選んだ理由、入ってみてどうだったのか等の質問がたくさん出され、それらに先輩が親身になって答えていました。

私の頃にはこのような体験はなく、正直、県庁では具体的にどのような内容の業務を行うかよく理解しない（単に私の情報収集不足かも？）まま県庁職員となったような気がします。学生のみなさんは、ぜひ、このインターンシップを利用して、佐賀県庁の農業分野ではどのような仕事を行っているのかを知っていただき（百聞は一見にしかず）、県庁に入ったらこんなことをやっていくんだという目標を見出す第一歩にしていだければと思います（佐賀県のHPには県が進めている施策等の情報が掲載されていますのでぜひ閲覧してみてください）。

私達先輩職員一同は少しでも多くの後輩を待っていますし、一緒に仕事をすることを楽しみにしています。



水田ほ場の基盤高測定



北山ダム監査廊の見学



佐賀県農業試験研究センター環境農業部 病虫害・有機農業研究担当

成富 毅誌 (H22卒 応生・植病 (H24院卒))

佐賀県農業試験研究センター環境農業部の病虫害・有機農業研究担当では毎年夏頃に2～4名程度のインターンシップ生を受け入れてきました。実習では関係機関との植物防疫・農業関係会議への同席等のデスクワークから、病虫害防除に関する試験補助などのフィールドワークまで、幅広い内容を体験いただきました。

専業農家出身の学生が少なくなった中で、水田靴を初めて履き、田んぼのぬかるみに足を取られて泥だらけになったり、農薬散布機を担いで薬液を噴霧したりすることは新鮮な体験だったようです。毎年暑い中、圃場を連れ回るのが気の毒でした。でも、汗だくになりながらも真摯に取り組まれていました。室内試験では体長1mm程度の微小害虫を顕微鏡で計数する作業等を体験いただきました。害虫関係の研究室の学生は平常どおり検鏡されていましたが、その他の学生は気持ち悪そうな表情を隠せない様子で、改めて同じ農学部でも学生は多様だと感じました。

参加者の感想を伺っていますと、担当の仕事はスーツを着た公務員像とは大きく異なっていたようです。もちろん、そのイメージどおりの仕事もあって、私も前所属（県庁園芸課）では毎日スーツを着て農政に携わっていました。今回のインターンシップでは、色々な仕事ができ飽きがこない県職員の一面を知っていただけた気がします。また、私の学生当時は基礎研究寄りの実験に明け暮れていたため、農家が直面する問題に真っ向から立ち向かう県職員の姿に感銘を受けたことを今でも憶えています。それに似た感想を抱いた学生も中には少なからずおられたのではないかと推察します。

これまでのインターンシップ生の中には卒業後に佐賀県職員に採用された方が多くいらっしゃいます。同じ所属の後輩はもちろん、振興センターに配属された後輩と現地で調査をしたり、畜産や行政など違う分野で活躍する後輩を見かけたりすると、佐賀県農業のために共に働いていることをたいへん嬉しく感じます。コロナ禍になってからは集まったの昼食や歓送迎会といった交流の機会が減り、少々残念な面もありますが、今後インターンシップを希望される学生さんには、佐賀県職員として働くとはどういうことか、視野を広げるうえでの参考に少しでもなれば幸いです。そして、近い将来の仲間となることを先輩職員一同楽しみにしています。

光富勝先生を偲んで

光富勝先生が令和4年2月に逝去されました。先生は佐賀大学農学部のご出身（S51卒 農化・食品）で、企業に就職後、佐賀大学農学部にて教員として奉職されました。約40年にわたる研究と教育の間に、キチン・キトサンに関する世界トップの研究業績を残されるとともに、あまたの有用な人材を世に送り出されてきました。同窓会としてここにお悔やみを申し上げますとともに、農学部出身の先生方、卒業生の皆様から頂きましたメッセージを掲載させていただきます。

大好きです， 光富先生

高木 胖
(S36卒 農学・育種)

光富先生は佐賀市は木原のご出身、佐賀西高校卒で、タウンボーイ的な雰囲気があって、とても好きです。

私は1972年（昭和47年）10月に佐賀大学育種学研究室に戻ってきました。その頃、大学紛争（特に不知火寮の電水料負担と撤去をめぐる紛争）は下火となっていました。新任の研究室には古賀（富永）幸枝さんが（S49卒 農学・育種）、一年下には古賀重成君（S50卒 農学・育種）がいました。光富先生は農芸化学科の食品製造学を専攻されていて（S51卒 農化・食品）、将来の奥様となる光富（富永）美穂子さんは生物化学専攻の学生さんでした（S52卒 農化・生化）。国は高度成長の最盛期にあって、フォークソングとニューミュージックの黄金時代でした。体育系サークルでは、神和住純効果もあって硬式テニス部は100名以上の大所帯（？）であったと記憶しています。光富先生は硬式テニスに汗を流され、キャンパスライフを青春されていたものと理解しています。

1980年（昭和55年）に光富先生は岡山の林原株式会社から佐賀大学農学部に戻ってこられました。それ以来、同僚として、同窓会の先輩として、ずうっ〜とお付き合いをしています。光富先生は農芸化学科、私は農学科です。大学の委員会では不思議とご一緒することはありませんでした。思い出すのは当時、教育学部に大学院を設置する構想があって、研究業績で助けることになったことです。光富先生と私、高木が援助教官（？）に選ばれていました。いわゆる名前貸しです。「教育学部の先生に？ 無いでしょうね」と光富先生は心配されます。私も、そ

の時は「恐れながら…」と文部省に「訴え出るさ」と言ったのを覚えています。1990年は終わりの頃でした。

光富先生はカニ・エビ類の外骨格の主成分でもあるキチン・キトサンの研究がご専門です。多くの国際学会に出席し、発表されています。私の活動は国内が中心だったので、欧州とか、ギリシャや地中海の国々での学会とかシンポジウムなど、先生のご活躍はとても羨ましく思っていました。

飲んだ勢いで、私は「農芸化学科は某大学の出身者ばかりだ」、「某大学の出来損ないを“ははっ〜”と有難く押し載せていて（光富先生は）苦労しているよね」とか、研究業績を見れば、誰がどのような研究論文を書いているかが分るので、「（論文が多数あると言っている、あの先生）本チャンの農芸化学会誌は（農学の）俺の方が多かぞ」とか、まくし立てて光富先生を困らせていました。聞き上手な方です。

当時、農学部同窓会における佐賀大学農学部出身教員には、育種学の高木胖（S36卒 農学・育種）と植物病理学の田中欽二先生（S39卒 農学・保護）がいて、光富先生と同世代には農業経済学の白武義治先生（S51卒 農学・農経）と作物学の有馬進先生（S52卒 農学・農経）がいました。その後、農業環境工学の若い田中宗浩先生（H4卒 生学・施設）が加わりました。

2018年（平成30年）10月12日には私の80歳のお祝いにお席をいただきました。ありがとうございました。教員の有志は2019年（令和元年）5月に先生の退職のお祝いを計画していました。光富勝先



光富先生と80歳の筆者

生、美穂子さんは共に硬式テニスがお上手です。お二人で、これからさらなる未来を描いておいでになったと思うのです。まだ若い光富先生に、16歳

も年上の私がこのような追悼文を書くのは、とても辛いものがあります。ご冥福をお祈りしています。

光富勝先生を偲んで

田中 欽二
(S39卒 農学・保護)

光富勝君、君はどうしてそんなに早く逝ってしまったのですか。一寸先は闇、ということは頭では理解できますが、心の中では納得がいきません。

君は学生時代はテニス部のキャプテンとして活躍されていました。卒業後はテニス部の部長として後輩を指導されるとともに、教職員のテニス部では中



助手会の研修旅行（昭和59年、雲仙）

心的な存在でした。

退職前に会った時には、学科長をされており、雑用で追いまわられていて、病気の治療に専念できなかったのではないかと悔やまれてなりません。

退職後の年賀状には治療に専念して、佐賀大学農学部教員のOB会に元気で参加したいと書かれておりました。

退職とともに入院され、2か年にわたる闘病の末に君は逝ってしまいました。どんなに無念だったことでしょう。

光富君、どうか安らかに眠りください。合掌



近藤栄造先生宅の新築祝いで（平成元年）

光富先生からの贈りもの

有馬 進
(S52卒 農学・農経)

光富先生とお付き合いは、私が佐大に奉職した1985年から2022年までの37年間でした。昭和の頃、私達は大学の中でも市中のお店でもよく歌いました。私は学生歌「楠の葉」一本槍でしたが、先生はいくつかの持ち歌があり、中でも加山雄三の「旅人よ」や「海 その愛」など、若者に希望を抱かせる爽やかな曲を朗々と歌われていました。とてもお上手でいらっしやっただけには驚きました。

さて、光富先生との個人的な思い出については枚挙にいとまがないので、以下では同窓会と農学部の公的な場面でのお姿をふり返り、先生への感謝を述べさせていただきます。

まず、光富先生が同窓会活動に取り組むお姿です。

現在、農学部同窓会は佐賀大学同窓会事務局に会員管理や会計等の業務を委託しています。しかし、以前は卒業生の教員がその業務を分担していました。私の着任後、白武先生が会誌発行、光富先生が名簿作成、有馬が会計の担当者となり、その体制が20年ほど続きました。会誌、名簿、会計は、いずれも同窓会の必須業務です。そのなかでも、名簿作成は卒業生の異動と住所を把握する重要な会員管理業務で、同窓会の維持発展の基盤となるものです。毎年、転勤・結婚などで音信不通となる会員も多く、加えて毎年160名以上の卒業生・修了生が入会しますので、その管理の御苦勞は如何ばかりであったろうと思います。しかし、先生は常にいやな顔ひとつされず肅々と取り組まれていました。先生が残された会員名簿は同窓会と農学部の貴重な財産として、今に受け継がれています。

次は、光富先生が学生募集と就職支援に力を注がれた教授時代のお姿です。佐賀大学も「国立大学」

ブランドだけで学生が集まり、就職できた時代は過去となりました。先生は少子化の中で志の高い受験生を確保するべく、農学部教員の先頭に立って学生募集に取り組みました。詳細な学部説明資料の作成に尽力され、多くの高校を訪問されました。一方、大学でもキャリア教育と就職指導が責務となり、光富先生は官庁、関係団体、企業等に働きかけて農学部単独での就職説明会や就職講座の定期開催を実現させ、学部就職支援活動を定着させました。さらに、大学全体の就職支援部局「佐賀大学キャリアセンター」のセンター長に就任され、佐賀大学の就職指導事業を力強く牽引されました。先生のご尽力により今日、多くの若者が希望に胸を膨らませて佐賀大学に入学し、そして夢を持って社会へと力強く羽ばたいています。これらは先生から佐賀大学と後進への有り難い贈りものとなりました。心から感謝いたします。

光富先生がお亡くなりになる半年ほど前、私はのんびりと田んぼ道を散歩されている先生と出会いま

した。しばし二人で立ち話を楽しんだ後、先生はいつもの和やかなお顔で「じゃあ、また会いましょう！」と仰いました。このお約束は現世では叶わなくなりましたが、そちらでお会いした時には、また十八番をお聴かせ下さい。ご冥福をお祈り申し上げます。合掌。



卒業式の後、談笑される光富先生（中央が筆者）

光富勝先生を偲んで

白武 義治
(S51 卒 農学・農経)

光富勝先生の生前のお姿を偲びつつ、心からお悔やみを申し上げます。

私と光富先生は佐賀大学農学部同期の入学ですが、光富先生と初めてお会いしたのは、私が農学部教務職員として就任した1985年4月です。当時、農学部では助手会が月一度開催されていました。専門が異なる先生方との勉強会、夏休み等にはキャンプ、登山、魚釣りなども企画されていました。夏の雲仙白雲池での家族ぐるみのキャンプ、初秋の雨の中の九千部山登山、大島あたりでの船釣りなど、忙しくも心豊かな頃の思い出があります。私は当時、大学に就きたいへんなプレッシャーを感じ、緊張しておりましたが、先生の温かいお人柄に触れたことが思い出されます。若い頃は構内で時々見かけましたが、日焼けした精悍な顔でした。研究、教育等でご多忙だったと思いますが、上手にテニスの練習時間もとっておられたと思います。農学部の先生方の中にも多くのテニス仲間がおられ、元気ハツラツとした姿が思い出されます。

同窓会関係では年に多くの飲み会がありました。その一つに、毎年、同窓生の農学部教員による忘年会が企画されていました。先生は2次会、3次会と最後まで残るタイプで、付き合いのいい方でした。高木胖先生や田中欽二先生と同じくらは飲まれていました。でも、口角泡を飛ばして議論に熱中するのではなく、比較的静かに味わっておられました。通常、2次会は皆さんが先生行きつけの愛敬町にあるスナックに誘われて行くことが多かったです。ここでは、先生はカラオケで熱唱、歌唱力は抜群、声も素晴らしかった。有馬進先生も上手ですが、両巨頭という感じでした。先生のレパートリーには加山雄三の「旅人よ」がありました。私もその歌が気に入り、その後、ずっと歌うようになりました。

教授の頃、農学部内の仕事で学生の就職担当をともに担うことができました。農学部同窓会にもたいへんお世話になりましたが、毎年のように、県庁など役所、研究所、企業、JAなどで活躍されている同窓生の方々に農学部へご足労頂き、各就業先の概要および就職体験などについて講演をお願いしておりました。先生はこのような学生の就職相談会などにもとても熱心に取り組みされました。また、同窓生の方々の活躍ぶりについて多くの情報を持っておられました。今度はあの同窓生に來校して講演をお願い

できたらいいな一とか、その内容に驚くことが度々でした。また、山崎製パン、伊藤ハムなど多くの企業の人事担当者との情報交換をされていたように思います。

先生の研究室は女子学生のゼミ生が多かったと思います。研究室の壁に貼り付けられた多くの記念写真がその様子を示していました。非常に忙しい時も、研究室はきちんと整理整頓され、清潔な研究環境を保持されていたように思います。キッチン・キトサンの研究を続けてこられました。その研究内容が評価され、場所を失念しましたが、欧州のどこかで研究報告することになったと喜んでおられたことを思い出します。

60歳を過ぎた頃、時々、私は昼休みなどに先生の

研究室を訪ねることがありました。JICAの古賀重成さん（S50卒 農学・育種）の活躍ぶりなど多様なことを話しました。その中で、定年退職後も年に一度の飲み会だけは続けましようか、などと話しておりました。そして、しばらくしてから、先生が定年退職された後すぐ病院に入院されたことを聞きました。私はお見舞いもできず、その後の経過情報を聞くこともなかったのですが、退院されたら、カラオケでも楽しめたらと、安易に待っておりました。そんな折、悲報が届きました。

謹んでお悔やみ申し上げますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。合掌



光富先生から教えていただいたこと

田中 宗浩
(H4卒 生 生・施設)

私は1997年に佐賀大学へ採用していただいて以来、農学部同窓会の一員として先輩先生方から沢山のご指導をいただけてきました。光富先生とのご縁はそれからになります。

着任によって学生から教員へ立場が変わりまして、学内外の沢山の先生方からは引き続き忌憚のない厳しいご指導を頂いていたものの、光富先生は独特の柔らかい接し方をして頂いたように感じてきました。いつも柔らかく微笑みながら、決して強い言葉やネガティブなおっしゃらず、話に必ず耳を傾けて受け止めていらっしゃる印象がありました。また、

いつも前向きで、穏やかな口調でお話を頂いていた様子を記憶しています。

「大丈夫、なんとかなるよ」、「だいたいね、大学の先生は研究費が無い時ほどイイ研究するとよね。自分もそうやったよ。心配せんでよか」、「なんかあったらさ、話きいちゃるよ」…いつも何気ない語り口で私達の心の重みを軽くしていただきました。また、そっと背中を押してもらい、気持ちを前向きにさせていただきました。次は私たちがこのような役割を担う立場になったと思っています。

光富先生から助けていただいたこと、教えていただいたことは沢山あります。頂戴したご恩は決して忘れず、これから周囲の皆さんへ返していきたいと思えます。長い間ご指導を頂きまして、ほんとうにありがとうございました。



この写真は2013年に光富先生とのご縁で中国四川大学のシンポジウムに参加させていただいた時のものです。忘れられない貴重な思い出です（成都パンダ基地にて、左から3人目が光富先生、同2番目が筆者）。

恩師 光富勝先生を偲んで

沖縄工業高等専門学校 田邊 俊朗
(H13 鹿児島大連合農学研究科修了, H8 卒 応生・食化)

令和4年2月に光富勝先生がご逝去されたことに、心より追悼申し上げます。

思い返すと、光富先生に初めてお目にかかったのは私が19歳になったばかりの頃でした。当時私は指定難病に認定され、佐賀県立病院好生館7階東病棟で闘病生活を送っていました。そこへ光富先生が6人部屋の向かいのベッドに入院してこられたのです。短い間ではありましたが、農学部や研究のお話を伺うことができ、その後の私の進路を決定する大事な出会いになりました。先生のベッドに親子睦まじく息子さんと娘さんがちょこんと一緒に腰掛けていらっしやったことを憶えています。

先生のお人柄に惹かれ、私は佐賀大学農学部応用生物科学科に進学することとなります。気が早いのですが入学オリエンテーション後、直ちに光富先生をお訪ねし、先生の下で卒業研究したいと申し出ました。光富先生は食品製造学などを講義されていました。質疑で学生の回答が間違っているにもかかわらず、教卓の下で手を振って間違っているよと示されるような穏やかな授業でした。

先生が助手から助教授になられた頃、口約通り当時の食糧化学教室に入り、卒業研究のご指導を賜りました。酵素の精製法を徹底的に、文字通り早朝から深夜までつきっきりでご教示いただいたのです。このように手厚く丁寧な指導のやり方こそ、光富先生の教育スタイルであったと思います。現在、私は沖縄工業高等専門学校に勤務しております。教育の

現場で、先生の教育指導にかける情熱、その幾ばくかでも受け継ぎ、伝えていきたいと思えます。

その後、大学院修士課程、鹿児島大学大学院連合農学研究科博士課程へと進み、変わらず光富先生のご鞭撻を賜りました。博士課程に入るときには、研究者の端くれになるのだからと言われ、光富先生ご自身の指導教官であった大宝先生や、当時共同研究をされていた主立った先生方をお招きし、博多でお披露目をさせていただきました。病弱でさして才覚に恵まれない私の将来を案じてのことであつたのだろうと思います。先生の寛大なご配慮に、私だけでなく両親もいたく感動し、深く、深く感謝申し上げます。このような学生に対する先生の慈愛は、まさに師父と敬愛させていただくべきものでした。佐賀西高から、佐賀大学農学部、修士課程、博士課程にわたって私は先生の後輩にあたり、直弟子であることに誇りを感じております。

先生が教授となられ、博士論文の主旨指導教官になっていただけたことも私にとって幸運でした。先生は連合大学院を構成する佐賀大学、宮崎大学、鹿児島大学、琉球大学から「特に厳しい」先生方を審査員に選んだと仰っていました。私はその言を押し、そんなに厳しい方ばかりでは学位取得できないのではないかと恐れたのですが、実はそうではありませんでした。審査員に就任していただいた先生方は、私のような学生からすると恐れ多いと感じる著名な方ばかりでした。これもまた光富先生が私の将来を案じ、目指すべき研究者のあり方を示していただいたのであろうと思います。そしていよいよ学位取得が確実になった頃、「話がある」と、光富先生から研究室に呼び出されました。まさか論文に不備でもあつたのかと心配したのですが、まったく別のこと



宮崎県日南市鶴戸神宮で、平成11年第244回日本農芸化学会西日本支部大会参加の折に



内装改築を終えた研究室で、筆者の1歳になった長男を連れて（平成19年）

でした。他の学生達を人払いして、私だけに語られたのは、先生ご自身の病気についてでした。先生がそのような不安と焦燥の混ざった表情を浮かべられたのは初めてのことでした。「誰かに話したかった」と、語られるまま、私はただただ、呆然とお話を聞くばかりでした。話し終えた後、ご自分に言い聞かせるように「私はこんな病気では死なない」と決意されていた時も、何も言えませんでした。しかし、そのお言葉通り、先生はその後もずっと研究を続けられ活躍されるのです。

先生の、病気を抱えながらも第一線にあり続ける様に自分も触発されました。学位取得後、秋田県立大学に就職し、京都大学に転勤したところで私は結婚し、式と披露宴では光富先生に主賓としてご臨席

を賜りました。その際、先生は目に喜びの涙を浮かべられながら、「良かった、本当に良かったですね」と仰られたのです。卒業後もずっと親身になっていただけることに、自分はなんと良い出会いを与えられたのだろうと感謝しました。沖縄高専に転勤し、自分の教え子が光富先生のもとへ編入学した際に、ようやくご恩返しがひとつできたと思えました。本当は共同研究や予算獲得など、ご恩返しの方法は色々あったはずなのに、ほとんど何もできなかったところに自分の非才を恥じるばかりです。寛大な光富先生のことですから、「別に恩返しなんて無くてかまわない」と仰られることでしょう。不肖の弟子は先生から賜った研究と教育への情熱を失わぬよう、次代に伝え続けます。

光富先生を偲んで

物産フードサイエンス株式会社 平野 勝紹
(H22 鹿児島大連合農学研究科修了, H19 院修了)

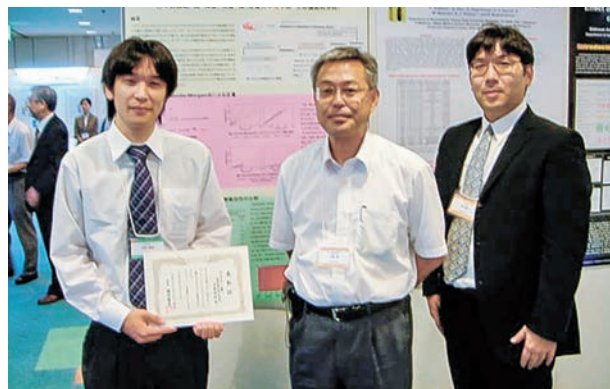
光富先生、謹んでご逝去を悼み、生前の温かいご指導に対して改めてお礼申し上げます。

先生の研究室に所属させて頂きましたのは修士2年生になってからです。その頃は、研究に対する知識が乏しく、結果を持っては先生のお部屋にご相談に伺い、ご指導頂いておりました。あれから15年経っておりますが、先生からご教授頂きました日々は今でも鮮明に思い出されます。

先生のもとを巣立った後も研究室に伺わせて頂いた際は温かく迎えて頂きました。また、学会等でお会いする機会を楽しみにしておりました。私もようやく独り立ちすることができました。今は若い頃のように飲めなくなりましたが、これまでの事、これからの事を肴にお酒をご一緒する機会が増えると良いなと思っていた矢先の突然の訃報、いまだに信じられない思いです。

今回、このような寄稿の機会を与えて頂き、先生の業績に関しましては他の著者様方をお願いすることとし、光富研究室最後の博士課程修了者として私はあの頃の思い出について振り返らせて頂ければと思います。

先生の研究室で初めに取り掛かった研究は、N¹-モノアセチルキトヘキサオースを用いたキトサナーゼ活性の新規比色定量法の確立でした。初めて先生



第21回キチン・キトサンシンポジウムでポスター賞受賞(平成19年)



第23回キチン・キトサンシンポジウムでの先生の挨拶
(平成21年、佐賀大学)

の研究室に伺わせて頂いた時は、この分野に無知で、グルクン (GlcN: グルコサミン)、グルクナック (GlcNAc: N-アセチルグルコサミン) とまったく聞き慣れない音韻が面白く、先生にご説明頂いている間、心の中で「呪文のような言葉だなあ」とニヤツとしたのを覚えています。

博士課程ではこの研究を発展させ、 N^1 , N^4 -ジアセチルキトヘキサオースを用いたキトサナーゼの切断様式を解析しました。まず、解析に多大な労力を必要としたキトサナーゼの切断様式を簡易、簡便に解析できる手法を開発しました。そして、これまではキトサナーゼの基質切断特異性において、Subclass I (GlcN-GlcN, GlcNAc-GlcN), Subclass II (GlcN-GlcN), および Subclass III (GlcN-GlcN, GlcN-GlcNAc) の3種とされていたキトサナーゼの切断様式に、GlcN-GlcN, GlcNAc-GlcN, GlcN-GlcNAc を切断する Subclass IV が存在することを明らかにし、論文にて新たに提言しました。このような新たな提言ができたことは研究者として誰もが経験できることではない貴重な経験であったと思っております。しかし、当時から懸念としていたことを今ここで書かせて頂きます。光富研究室でのキトオリゴ糖の分離精製技術は世界一である、と当時から自負しており、この試験に用いる N^1 , N^4 -ジアセチルキトヘキサオースの精製は当研究室でしか行えず、この画期的な方法の日本、そして世界への展開は難しいのではないかと感じておりました。今、本論文について検索をかけてみると、2017年に Nature にて引用されて以降、2022年までに22の被引用数を得ております。しかし、その特定には旧来の方法が用いられており、まだまだ、世界は我々の技術には追いついていないようです。

ともあれ、これらの研究成果により、第21回キチン・キトサンシンポジウムではポスター賞を頂くことができ、先生と強く手を握り合えたことは、この上ない良い思い出となっています。

先生の研究室では、修士課程、博士課程、研究員として私が在籍した7年間で、約50名の学生、大学院生が在籍し、卒業、修了していきました。

色々な節目で飲み会の機会があり、先生は学生とのひと時を楽しんでいらしたように思われました。学生も、先生の柔和なお人柄を好み、周りにはいつも学生が集まり、毎回にぎやかな会だったと記憶しております。また、一度、カラオケもご一緒し、先生の美声をお聞きした次の日は、学生と研究室で盛り上がったことが忘れられない思い出です。

こうやって振り返りますと、様々な思い出が尽きることなく溢れ出てきます。しかし、先生からは「文章は簡潔にわかりやすく、長く書けばいいというものではない」という教えを頂きましたので、ここまでとさせていただきます。



第23回キチン・キトサンシンポジウムでの講演
(平成21年、佐賀大学)



平成18年度卒業式



飲み会後の集合写真 (平成19年)



研究室メンバー (平成20年)

今後は、先生のもとで学ばせて頂きました研究(仕事)への向き合い方・考え方、後輩(部下)への指導方法を生かし、より自分を高めることができるよう精進できればと思います。

光富先生のこれまでのお導きに心より感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。



光富先生とカラオケ(平成20年)



平成21年度追出しコンパ



平成22年度追出しコンパ



平成24年度卒業式後の記念写真



平成24年度追出しコンパ

光富先生、ゆっくりとおやすみください

佐賀県農業協同組合中央会 山崎 智美
(H25院修了, H23卒 生機・食化)

光富先生のご逝去を悼み、生前の温かいご指導に対し、改めてお礼申し上げます。

数年前に体調を崩されたとは聞いていましたが、その後は元気に過ごされていると思っていたので、光富先生の訃報を聞いたときは本当に驚きました。68歳なんて早すぎます。先生はとても仲の良いご夫婦でしたので、退職後は奥様とゆっくりセカンドライフを楽しんでいたかったですと、本当に残念に思います。

光富先生には、在学中大変お世話になりました。卒業論文や修士論文はもちろん、実験で使う器具を割ったり、壊したり…多大なご迷惑をおかけしましたが、いつも優しく穏やかに指導して下さったことが昨日のここのように思い出されます。

先生とは就職した後も何度かお会いする機会がありました。毎年多くの学生と接するにもかかわらず私のことを覚えていてくださり、笑顔で声をかけていただいたこと、とても嬉しく思っていました。もう先生の笑顔を見ることができないと思うと、とても悲しいです。

光富先生のご冥福を心よりお祈りいたします。お世話になりました。ゆっくりとおやすみください。



飲み会の場ではユニークな面も
(先生の隣に映っているのは後輩です)



いつのコンパか忘れましたが…お酌しているのは後輩の子



とある飲み会での集合写真

若手OB・OGからのメッセージ

安全・安心な食料の生産と供給に向けて

佐賀県農業協同組合中央会 山崎 智美
(H25 院修了, H23 卒 生機・食化)

私は平成 25 年 3 月に佐賀大学大学院農学研究科を修了後、佐賀県農業協同組合中央会に入会しました。漢字で書くとピンとこないかもしれませんが、略称は「JA 佐賀中央会」といいます。「JA (Japan Agricultural Co-operatives)」は聞いたことがある人も多いのではな



いでしょうか。JA グループでは信用・共済・経済など様々な事業を展開しており、全国・県・市町村段階に多くの組織が存在しています。

JA 佐賀中央会は、JA で提供するサービスや JA の経営安定のための支援など専門性をもって取り組む県域団体の一つです。

私が在籍する農政広報課では、農政活動と広報活動の二つの業務を行っています。農政活動は、農家が抱える課題や意見を農業政策に反映するために国や県に働きかける活動のことです。例えば、「台風の影響で米がとれず、生活が苦しい。」という農家の要望があれば、被害状況などの実態や今後の見通しを分析し、行政に届けます。一人一人の農家では届かない声を取りまとめ、発信することで行政からの支援を得ることができます。

一方、広報活動は、新聞広告やマスコミ対応が中

心です。多くの小学校が参加する「学童オリンピック」や「さが桜マラソン」にも協賛しており、JAグループ佐賀や農業のPR、食の大切さを伝える活動を行っています。広報の仕事は正解がなく、どう表現すれば見る人の印象に残るのか、伝えたいことが正しく伝わるのか悩むことが多いですが、上手くいけば人の心や行動を動かすことのできるやりがいのある仕事です。

私は学生当時、酵素の阻害剤に関する研究をしていました。研究内容と業務内容に関連はないのですが、研究報告会での資料作成や発表、試行錯誤しながら実験した経験は仕事を進めるうえで役に立っていると感じます。研究職でなければ大学で学んだスキルを直接活かすことはできませんが、求める結果に向けてアプローチを考え、実行するという理論的な思考力はどんな仕事にも必要になると思います。

最後に、在学生の皆さんには、限りある大学生活を思いっきり楽しんでほしいと思います。社会に出ても勉強はずっとついて回るので、時間に余裕のある学生のうちに大切な友人とやりたいことを全部やりきる気持ちで日々を過ごしてください。



会員のた場

学生時代から第二の定年を迎えるまでの紆余曲折の思い出

入江 裕章 (S49卒 農化・土肥)

学生時代

昭和45年4月に入学した農芸化学科は土壌肥料学、発酵生産学、食品製造学、生物化学の4教室からなっており、4年生になるといずれかの教室に所属することになります。私は土壌肥料学教室を選択し、故永田正直先生、故宮口尹男先生、故矢野綱之先生の3人の先生方の指導のもとで、学生生活の最後を送りました。

就職→退職→大学院入学

昭和49年3月に土壌肥料学教室を卒業し、1年間研修生として残りました。そして、福岡市に本社を置く農薬の製造販売会社である三笠化学工業株式会社に入社し、農薬の製剤研究部門に配属されました。希望に燃えて仕事に取り組んでいました。しかし、在学中に大学院進学を考えていて、願書提出前に断念したことを悔んでいました。そこで、大学院受験の許可を会社から頂き、受験し合格することができました。昭和52年4月に大学院農学研究科農芸化学専攻に籍を置き、学部時代と同様に故永田正直先生、故宮口尹男先生、故矢野綱之先生の3人の



昭和48年度佐賀大学農学部農芸化学科卒業生同窓会（平成6年12月10日、中央は内田泰先生、前列から2番目が筆者）

先生方のご指導の下、「土壌とリン酸アンモニウムの反応について」の研究テーマを頂き、新たな気持ちで大学院生活に入りました。その成果を九州農業研究会で発表する機会を頂いたことはいい経験になりました。また、農業高校で1年間土壌肥料学の非常勤講師として教壇に立てたことは、経済的にも助かり、人生的にもいい経験になりました。在学中に



九防協の歓送迎会（平成23年4月、このうち佐賀大農学部出身者が4名（石田省三郎氏：S39卒 農学・保護、財津庄次氏：S56卒 園芸・応動、江口浩喜氏：S58卒 農学・病理）います。前列右端は野中福次元九防協会長：元佐賀大農学部長、その左隣が筆者）



九防協の懇談会（左から3番目が筆者、右から3番目が松崎正文氏：S47卒 農学・病理、左端が田代暢哉氏：S54卒 農学・病理）

第2種放射線取扱主任者の資格試験に合格しましたが、この資格をその後活用することがなかったのは残念でした。

再就職

大学院修了後の就職は困難でした。しかし、故井上喜太郎社長の寛容さで再び三笠化学に採用していただき、退職前の職場に配属されました。ありがたかったです。

福岡市天神に九州地区における農作物の病虫害防除試験の企画調整を担っている九州病虫害防除推進協議会（以下略称「九防協」と称する）という組織があります。その九防協には各農業会社からの出向制度があり、昭和54年は三笠化学が出向社員を出す年でした。そのため、配属後1か月で本社の農業技術部に異動し、三笠化学としては2代目の出向職員として九防協での業務が始まりました。

各県の農業試験場、そして病虫害のことは、まったくわからないままの出向でした。しかし、当時の故末永一会長のご指導の下、楽しく出向業務を終えることができました。九州の各試験場の病虫害研究員の方と名刺交換させていただいたことで、これからの仕事に大いに生かすことができ、感謝しています。

1年の出向期間が終わり、会社に戻り、本社で農業の普及推進部署に配属されました。仕事の内容は農業の普及推進、農業展示の業務が主体でした。各県の農業試験場、農業改良普及所、経済連、農協での普及営業推進で、通算20年近く佐賀県の担当をして、佐賀大農学部の同窓の方にはたいへんお世話になりました。ありがとうございました。

その間、会社は平成8年5月に八洲化学工業株式会社と合併し、社名は八洲化学工業株式会社となりました。さらに、平成16年11月には住化武田農業株式会社の系統事業を引き継ぎ、社名が協友アグリ株式会社となりました。この間、大阪営業所勤務時に除草剤の販売コンテストで全国第3位に入り、サンフランシスコにご褒美の研修旅行に招待されたのが初めての海外で、たいへん感激しました。

また、普及推進業務の成果の一つとして、ダニ類の気門封鎖剤である「エコピタ」をハウスミカンの難防除害虫であったミカンハダニを対象にした九防協での連絡試験の結果をもとにして普及資料を作成し、九州各県のハウスミカン産地で推進して成果が出たのは大きな喜びでした。

そして、平成22年9月、協友アグリ福岡支店で九州地区の技術普及推進業務を最後に定年退職しました。

第二の職場

平成23年4月から、縁あって九防協にお世話になっています。九防協は九州地域における主要農作物の安定生産上障害となっている病虫害防除の諸問題を解決するため、本会の会員（農業関係企業および団体）と行政および公的試験研究機関（普及機関を含む）の連携による技術開発を円滑に行うためのパイプ役として昭和45年に設立されたものです。また、近年は新たに設立された病虫害防除試験受託法人とも連携しながら現場主義に徹した防除技術の確立に貢献するべく、各種事業を推進しています。平成22年4月には法人格を取得して一般社団法人になりました。

ここでの業務は主に農薬の連絡試験の調整と事務連絡です。連絡試験には普通作、野菜作、果樹、茶樹の4分野があり、毎年、試験設計会議と成績検討会を開催しています。近年、委託薬剤の件数は減少していますが、露地野菜、果樹ではドローンによる試験が増えています。会議後には懇談会を開催し、会員と試験機関の情報交換、昼間の会議で話し尽くせなかったことを話したり、旧交を温めたりと、懇親の場となっており、たいへん盛り上がっています。昨今のコロナ禍のもとで、懇談会の機会が少なく

なったことはとても残念です。

そして、令和5年3月に第二の定年を迎えることになります。佐賀大農学部を卒業後、幾多の紆余曲折がありました。しかし、いつの時代も一生懸命やっていたればやがて道は開けていくと思います。これまでずっと農業関係の仕事に携わってこられたことはほんとうに幸せでした。これからは家庭菜園、道の駅巡りを楽しみたいと思っています。

今回、寄稿の機会を与えていただいたことに感謝申し上げます。

佐賀大サッカー部育ちが語るワールドカップカタール大会

松尾 和敏 (S54卒 農学・病理)

私は1975(昭和50)年入学で専門課程では植物病理学教室でした。そして、学部時代の4年間、サッカー部に所属していました。

ということで、教室の同期で現在同窓会報編集担当の田代暢哉氏からこの度のサッカーワールドカップ(W杯)カタール大会を機に寄稿をと話があったのです。

そこで、W杯の話に行く前に、私のサッカーとの関り、そして大学時代のサッカーに纏わる話を少しさせて下さい。

私は長崎市生まれですが、サッカーとは中学校で出会って3年間、高校で3年間やった後、佐賀にやってきました。そして、確か入学式の翌日には農学部圃場そばのグラウンドにさっそく行き、サッカー部への入部をお願いしたのでした。当時部員は全学部年で20数名おり(写真1)、農学部生は5~6名いました。それからの4年間というもの勉強そっちのけで、サッカー漬けとか明るい時はサッカー、暗くなると先輩、後輩入り混じってのマージャン三昧でした。

その学部時代、サッカーと学業との間の一番の思い出は、私が専攻した植物病理学教室の当時教授の故野中福次先生とのエピソードです。私は3年生になるとサッカー部の主将を任されました。当時、佐賀大のスポーツ系クラブ(部)では、ほとんどが3年生の3月末で次学年に主将を引き継ぐ中、サッカー部だけは参加していた福岡県大学リーグが6月末までであったことから、私は4年生の6月末まで主将を務めていたのです。私の卒論の指導教官は助教授の佐古宣道先生(後に佐賀大学長)でしたが、教室主



写真1 1976年度佐賀大学サッカー部員
(上右端：坂田道孝先生)



写真2 一級先輩方の卒業記念写真でもサッカー姿の筆者
(下右端)、野中福次先生(中央)(1978年3月)

の野中先生は4年生になると部活などは止めて卒論に集中するようにと厳しく指導されていたのです。しかし、確か野中先生は当時農学部長か何かで忙しく、私はその厳しい目を掻い潜り、サッカーを、しかも主将を6月末まで続けたのでした。ですが、後に聞いた話では野中先生は私が4年生になってもサッカー



写真3 OB会フットサル(佐賀市, 2018年5月12日)



写真4 OB会キャンプ時に訪れた大分県九重夢大吊橋にて(2019年9月4日)

を続けていたことをご存知だったようで、温かい目で見て下さったことに深く感謝しています(写真2)。

さて、私は大学の同窓会(長崎支部)や特に植物病理学教室の同窓の皆さんとは卒業後も良く集ってきましたが、サッカー部仲間となりますとまた違った深いつながりを感じます。日頃の練習や試合では汗水たらで体を張り合いながら、そして、くたくたの中で勝ちの喜び、負けの悔しさを共に味わったからか、やはり社会人となっても心身に寄り添う付き合いが続いています。特に私の上下4~5年間の仲間(現在15名位)は、卒業後40年も経つというのに数年に一度は関東、関西などからも佐賀に集合して、昼間はフットサル(ミニサッカーゲーム)をやり(写真3)、夜は酒を酌み交わすのです。また、時には山中でキャンプをしたりもします(写真4)。

その極めつけがこの度のW杯で、11月27日佐賀市内で昼間フットサルをやり、夜は同じ宿に皆泊まってコスタリカ戦を大部屋でテレビ観戦する予定でした。しかし、コロナウイルスの急速な再拡大で、その直前にやむなく中止となったのです。本当に残念でした。

ですが、この佐賀大サッカー部OB会は、気力、体力、命がある限りは永遠に続くことでしょう。

次は、当時サッカー部の顧問(監督)だった教育学部体育学科の坂田道孝先生(写真5)のことです。非常に優しくも的確な指導をされる先生でした。ところが、私が主将時の3年生半ば頃、筑波大での国内留学研修で半年以上もおられなかったのです。ですので、日常の練習は勿論のこと、試合の先発メンバー決めなどは主将の私がすべてやらねばならなかったのです。そして、最もたいへんだったのは試合中のメンバー交代で、私はポジションがセンター



写真5 国内留学研修から帰ってこられた坂田道孝先生(左端)と3,4年生部員(1979年7月)

ハーフで試合を組み立てながら、かつ、全員の状況を観ながら適時に適材適所のメンバー交代を判断しなくてはいけないことでした。なかなかうまくいきませんでした。そのお陰で「Look around」という周囲をよく見て(目配りして)判断し行動する、ひいては周りの意見や情報等を十分に把握、習得して的確な判断に努めるという、サッカーのゲーム中だけではなく、その後の仕事や社会生活等においてもたいへん大事なことを少しでも身に着けることができたのではないかと考えています。

それと、坂田先生は1985年(昭和60年)、40歳で佐賀県サッカー協会理事長に就かれ、佐賀大で教鞭を執りながらも1999年(平成11年)まで務められました。そしてその間、佐賀県内にプロチームを作ろうと尽力され、1993年(平成5年)に鳥栖フューチャーズの誘致と現在Jリーグに所属するサガン鳥栖の設立(1997年)に奔走されたのです。また、その設立後はサガン鳥栖の運営委員としても頑張られ、あの立派なスタジアム建設にも深く関わられたようです。

ところが、坂田先生はサガン鳥栖がJリーグに加入して1年足らずの2000年(平成14年)1月7日、

54歳の若さで腎臓がんに因り逝去されたのです。そして、サガン鳥栖は坂田先生が亡くなられた1月7日に因んで、選手の背番号「17」を永久欠番としています。選手以外でこのような扱い方をするのはたいへん異例で、いかに坂田先生がチームに慕われ、かつ大きな貢献をされたかの表れではないでしょうか。サガン鳥栖はJ2から2011年（平成23年）にJ1昇格後は一度も降格することなく頑張っています。また、今回のW杯の日本代表（SAMURAI BLUE）のMF鎌田大地選手とGK権田修一選手は、若い頃このサガン鳥栖にいたのです。このようなチームや選手の活躍を坂田先生は細い目で満面の笑顔で喜んでおられることでしょう。

さて、私は学部卒業後大学院（修士）に進みました。ところが、修士生は大学サッカー部ではできないということで、佐賀市内の社会人チーム、佐賀サッカー（SS）クラブで続けてプレーしていました。また、大学院修了後は地元長崎県の農業職に就き、入庁4年後位に県庁サッカー部の立ち上げに関わりしました。県リーグ昇格はできなかったものの、長崎市内リーグや九州地区自治体サッカー大会に毎年参加するなどして楽しみました。そして、45歳時の公式試合中

に左膝の前十字靭帯断裂という大怪我をしてしまい、止む無く一線から退いたのです。

数えてみますと通算33年間、前期高齢者となった現人生の半分を勉強や仕事そっちのけでサッカーに没頭していたのです。そんな私が今回のW杯でのSAMURAI BLUEをどう観たかと言いますと、森保一監督と吉田麻也主将が長崎市出身で同郷ということもあり、いつになくたいへん強い思いがありました。ですので、「死の組」と言われたグループリーグEで優勝経験があるドイツとスペインに逆転勝利した瞬間は興奮で心臓がバクバクし、血圧が急上昇してしまいました。

このグループリーグ突破については歴史的な番狂わせとか下馬評を覆す首位通過などと褒められましたが、SAMURAI BLUEは着実に力を付けていると実感しました。決勝トーナメントではクロアチアに延長戦後、惜しくもPK戦で敗れましたが、その後ラウンド8で優勝筆頭候補のブラジルをこれまたPK戦で破り、最終的には第3位となったクロアチアと堂々と渡り合ったのですから高く評価して良いでしょう。さあ、SAMURAI BLUE、4年後に向かって頑張ろう!!

真っ黒なヒナ鳥との出会いから40年

はじめに

私は柳川市在住で、現在、三井化学アグロ株式会社福岡支店で農薬の仕事に携わっています。



筆者（東よか干潟にて）

大学時代は植物病理学教室の野中先生のもとで指導いただきました。仕事の関係で、野中先生が九州病害虫防除推進協議会の会長をされていたご縁もあり、卒業後も引き続きお世話になっていました。今回、編集担当の方から趣味のバードウォッチングについて原稿を依頼され、投稿した次第です。

高校時代：野鳥に興味を持ったきっかけ

ある日、自転車での通学時に、これまで見たこともない真っ黒な野鳥のヒナを偶然見つけました。図

江口 浩喜（S58卒 農学・病理）

鑑で調べてみると、今まで見たことも聞いたこともないヒクイナという鳥のヒナであることがわかりました。このことが、子供の頃から動物や自然が好きだった自分を野鳥の世界に目覚めさせるきっかけとなりました。そういう目で周りを見るようになると、身近なところにも多くの野鳥がいることに気づきました。これが野鳥との付き合いの始まりです。



植物病理学教室／田植え後の集合写真

大学時代：生物研究会での活動（本格的に野鳥に夢中になった時期）

ヒクイナから始まった野鳥への思いはだんだんと膨らんできました。でも、一人では何から手を付けてよいかわからずにいたところ、大学で生物を調査しているサークルがあり、その中に鳥班があることを知りました。鳥班の先輩について野鳥の知識を深めたいと思い、すぐに入会しました。生物研究会には、鳥班の他、植物班、ベントス（底生生物）班、魚類班、動物班があり、それぞれの分野で佐賀県内の動植物の調査を行っていました。生物研究会は調査だけでなく、山登りやキャンプ、大学祭では神輿を作ったり露店を出したり（当然コンパも）と楽しいサークルでした。

鳥班では主に有明海に渡ってくるシギ・チドリ類やガン・カモ類の調査を行っていました。週末や平日でも時間があれば足を運んでいました。大学から有明海までは自転車で約30分、行きはどんな野鳥に会えるかという期待感であつという間に到着します。でも、見終わった後の帰り道のつらいこと、つらいこと。暑い夏の日や寒い冬の日、収穫がない時はなおさらでした。

当時の有明海にはバーダー（野鳥観察者）の姿はほとんどありませんでした。自分一人で野鳥を独り占め、という感じでした。今でこそ、バードウォッチングは一般的になってきています。しかし、当時はNHK紅白歌合戦のイメージ（日本野鳥の会＝紅白の客席カウント）が強く、また、望遠鏡を抱えていると土木関係者に間違われる程度の認知度でした。

現在、佐賀県側の有明海（東よか干潟、肥前鹿島干潟）は、日本有数の渡り鳥の飛来地として全国に知られ、多くのバーダーが集まる人気のフィールドになっています。2015年（平成27年）5月には国際的に重要な湿地として、ラムサール条約湿地に登録されました。春、秋のシギ・チドリ類の渡りのシーズンには毎日100人を超すバーダーが集まります。

大学卒業から現在まで

社会人になって、さっそくカメラと望遠レンズを購入し、野鳥の撮影も始めました。有明海や近くの山、公園などが普段の主なフィールドですが、九州各県や北海道、沖縄など遠方に出かけることもあります。野鳥の写真は、なかなか思い通りに撮れません。でも、これはという写真が撮れると、無理やり家族に見せては感想を聞いて一喜一憂しています



ヒクイナ（きっかけになった鳥）



生物研究会／黒髪山登山



生物研究会／コンパ



生物研究会／大学祭での神輿担ぎ（左端が筆者）



シギ・チドリの大群（東よか干潟）



タイシャクシギ（東よか干潟）

（妻や娘には迷惑のようですが…）。野鳥と触れ合っている時は、何もかも忘れて没頭できる至福の時間です。

これまでの野鳥との出会いで最も印象に残っているのは、1986年（昭和61年）9月16日、諫早の五家原岳山頂で遭遇した1万3,000羽のアカハラダカの渡りです。アカハラダカはハトくらいの大きさで、当時は九州でも見ることの少ない珍しいタカの仲間でした。この長崎でのアカハラダカの渡りが九州で最初に確認された事例でした。その後、アカハラダカが秋に朝鮮半島から対馬を経由し、長崎、熊本、鹿児島、沖縄を通過してフィリピン等で越冬することが分かってきました。九州各県の野鳥の会では、毎年この時期に渡りの調査を行っています。

個人でのバードウォッチングの他、日本野鳥の会筑後支部の会員として筑後地区管内（北は朝倉市、小郡市から、南は大牟田市まで）において、調査・研究・保護活動や探鳥会、野鳥写真の展示等を行うなど、週末は忙しい日々を送っています。

おわりに

バードウォッチングの中で思わぬ野鳥と出会えた時、知らなかった習性や行動を見ることができた時、思うような写真が撮れた時は至福のひとつです。

野鳥との付き合いは40年を超えました。しかし、まだまだ見たい野鳥、撮りたい野鳥がたくさんいて、今後も体が動く限り、野鳥との付き合いは続きそうです。

支部だより

佐賀県庁支部

令和4年度の佐賀県庁支部通常総会は新型コロナウイルス感染防止の観点から、昨年同様に書面による決議となりました。なお、議事につきましては過半数の承認により無事可決しました。



本年度は、中島綾美、澤山芽衣、串崎明日香、石橋璃可子、田中結華、高山大樹、田中つなみ、古賀優希、小林美穂、崎 颯太、藤浦淳次【敬称略】の11名が新たに会員に加わりました。現在の会員数は256名となっています。

例年であれば新たに入会された会員を総会で紹介



令和2年度から令和4年度の佐賀県庁支部新入会員を対象とした交流会（令和4年11月22日）

していました。しかし、ここ数年は会員が一堂に会
する機会を作ることができていませんでした。そこ
で、今年度、新たな取り組みとして「令和2年度から
令和4年度の佐賀県庁支部新入会員を対象とした
交流会」を催しました。新型コロナウイルスの影響
を考慮したことから、対象となる新入会員と一部役
員のみでの小規模開催でした。

しかし、開催した結果、参加した新入会員からは
「大学時代の話や今の仕事内容など、共通の話題を
同年代と話すことができた」、「大学時代の先輩・後
輩と久々に再会できて感動した」、「同じ時期に学生
時代を過ごした先輩・後輩が同じ佐賀県庁で仕事を
頑張っているのが分かり、とてもモチベーション
アップにつながると感じた」など多くの感想をいた
だき、同窓生の絆を深めることにつながる有意義な

活動となりました。また、後日ではありますが、若
手会員同士の繋がりによって新たに会員が入会され
るなどの良い効果も生まれています。

令和5年3月に開催を予定している「先輩を送る
会」へも、多くの会員の皆様に参加する形で開催で
きることを願っています。

なお、令和4、5年度の役員については以下のと
おりです。

令和4・5年度佐賀県庁支部役員

支 部 長	田代 浩幸	S61 卒 農学・病理
副支部長	三原 実	S63 卒 農学・作物
副支部長	瀬戸 和善	H2 卒 農土・造構
幹 事 長	田浦 孝	H9 卒 応生・種苗

支部長 田代 浩幸 (S61 卒 農学・病理)

佐賀県教職員支部

令和4年度の佐賀県教職員
支部総会は新型コロナウイルス
感染防止の観点から、昨年
同様に書面による決議としま
した。



議事では、事業報告として
農学部同窓会事業への教職員
支部役員の参加状況ならびに会報「ありあけ」に寄
稿した教職員を紹介し、あわせて決算報告を行いま
した。また、農学部同窓会との意見交換会では教職
員不足（農業科）解消についての意見交換をさせて

もらいました。

なお、令和4・5年度の役員については次のと
おりです。

令和4・5年度佐賀県教職員支部役員

支 部 長	江島 博文	S62 卒 農化・食管
副支部長	外戸口良文	S61 卒 農土・干水
副支部長	三原 聖子	S63 卒 農化・生化
幹 事 長	松尾 信寿	S63 卒 園芸・果樹

支部長 江島 博文 (S62 卒 農化・食管)

— 同窓会からのお知らせ — 会費対策担当からのお知らせ

佐賀大学農学部の同窓会は「会員相互の親睦を深めるとともに、母校の発展に寄与する」ことを目的
に昭和48年4月に設立されました。その根幹は卒業生・在学生の皆様と同窓会活動をご理解してい
ただくことにあります。

このため、役員会では、まずは皆様と同窓会の活動内容を知っていただくため、平成5年度から以下
の三つの活動に取り組むことにしています。

- ①会報やホームページ等を活用した同窓会活動のPR強化
- ②卒業生のネットワーク強化（住所確認、情報提供の充実）
- ③在学生への支援策の拡充

また、現在、県外にお住まいの方にも本会の活動に参加していただけるようホームページやFacebook、
場合によってはインターネットでのweb参加等も可能な環境を作っています。ぜひご活用ください。

- ホームページアドレス <http://sadai.jp/alumn/nougakudousoukai/>
- Facebookアドレス [佐賀大学同窓会@saganougakudousoukai](https://www.facebook.com/saganougakudousoukai)



← ホームページ
QRコード

さらに、在学生の皆様には同窓会に加入していただくことで、以下（農学部同窓会の活動③）の支援制度も利用していただけます。

with コロナ時代を迎え、同窓会としても、より魅力ある活動を展開していきたいと考えています。このような活動を支えるために同窓会への加入、そして会費の納入をぜひともお願い申し上げます次第です。また、すでに加入されている方は周囲の未加入者に加入をぜひ勧めていただきますよう、改めてお願いします。

さらに、平成5年度は会報送付とあわせた住所不明者調査も計画しております。積極的なご協力をぜひお願いします。

以下に同窓会の活動概要を紹介します。

○農学部同窓会の組織

1) 役員

・会長1名、副会長3名、理事16名、監事2名、役員（各支部長）7名

2) 同窓会の支部構成（7支部）

・佐賀県庁支部、佐賀県教職員支部、佐賀県農協連支部、農業自営者の会、佐賀県支部、神埼支部、熊本県庁支部

○農学部同窓会の主な活動内容

1) 会員の親睦，組織活動の活性化

- ①総会，理事・役員会，専門担当部門の運営
- ②会員相互，農学部，在学生との情報交流
 - ・会報「ありあけ」の発行（7月，1月）による会員相互の情報交流
 - ・ホームページ，Facebookによる情報発信

③農学部との意見交換会の開催等による連携強化

④その他，同窓会活動への功労者表彰や各支部活動への支援など

2) 在学生への支援

- ①交流会等での就職ガイダンス講師の派遣
- ②交流会と合わせた懇親会の開催（近年は新型コロナのため中止）
- ③学生によるインターンシップ実施やマルシェ活動への支援
- ④その他（学生の海外研修に伴う経費の助成制度新設を予定）

○農学部同窓会の会費等の概要

1) 在学生は「準会員」。入学時に25,000円を一括納入。

※入会后10年間の会費となっており，入会金等も含まれます。

2) 卒業生は「正会員」。年会費2,000円。

※「終身会費」30,000円（70歳以上の方は15,000円）の納入をお勧めします。

会費は納入いただいた時点以降の取り扱いになります。それまでの納入以前の未納については問いません。会費の納入は，ゆうちょ銀行への振り込みとなっています。同窓会事務局（Tel 0952-23-1253）まで連絡をいただければ，払込取扱票をお送りします。



同窓会の活動内容，加入や会費納入に関する質問など，
お気軽に同窓会事務局までお問合せください。



（同窓会副会長・会費対策担当 鐘ヶ江直雅 S56卒 農化・生化）

編集後記

- 佐賀大学農学部同窓会報「ありあけ」は会員同士、会員と大学、そして会員と在学生とを繋ぐ重要な役割を果たしています。2007年（平成19年）の創刊以来、多くの皆様に支えられて、今号で31回目の発行になりました。
- これからもその使命を果たすべく、多くの会員の皆様に投稿していただきたい、そして、同窓生の活躍の様子を紹介するとともに、在学生へのメッセージや後輩へのアドバイスになるものがあり、同窓会への関心を高め、同窓会活動の活性化を図るものになりたい、そのような思いで編集にあたっています。
- 巻頭言では佐賀県農業試験研究センターの鍵山所長に佐賀県農業を支えている同センターについて紹介いただきました。多くの同窓生による革新的技術開発の様子が紹介されています。
- 農学部情報では就職関係情報、研究室紹介に加えて、インターンシップについて取り上げました。インターンシップは在学生と卒業生とを繋ぐ機会でもあります。今後とも学生の皆さんの積極的な取り組み

が期待されます。

- 昨年2月に逝去された光富勝先生への追悼記事では同窓の先生方、卒業生の皆様に玉稿を賜りました。先生のお人柄、ご功績、先生への感謝の思いが伝わっています。教育と研究に邁進された先生の偉大さが偲ばれます。改めまして、お悔やみを申し上げます。
- 若手OB・OGからのメッセージと会員の広場では4名の方に寄稿いただきました。それぞれの立場で、公私ともに充実した日々を送られていることが伝わってきます。
- 支部だよりでは佐賀県庁支部と佐賀県教職員支部からの情報を掲載しています。次号ではより多くの支部からの活動報告が待たれます。
- 同窓会からは活動の一端を紹介するとともに、同窓会活動への理解と会費納入についてをお願いをさせていただいております。どうかよろしく願い申し上げます。

（編集担当 田代暢哉 S54卒 農学・病理）

協賛広告

この度の同窓会報発刊に際しまして、長引くコロナ禍で経済的にも厳しい状況の中、協賛広告をお寄せいただき誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げますとともに、協賛各社の益々の御発展をお祈り申し上げます。

JAグループ佐賀 消費拡大運動実施中!

食べよう! **飲**もう! **飾**ろう!

耕そう、大地と地域の未来。

JAグループ佐賀

JA佐賀中央会/佐賀市栄町3番32号 TEL.0952-25-5115

JAグループ佐賀



Grain & Pet Care Communication

株式会社 森光商店

〒841-8611 佐賀県鳥栖市藤木町字若桜9-7
PHONE.0942-85-1125(代) FAX.0942-83-8868

ホームページ <http://www.morimitsu.co.jp>



青果をとおして
健やかな暮らしを支えていく



福岡市中央卸売市場



福岡大同青果株式会社

代表取締役社長 丸小野 光正 (S 52卒)

〒813-0019 福岡市東区みなと香椎3丁目1番1-204号 TEL(092)235-8950(代表) <http://fdydo.co.jp>

草場昭夫 (監査役) (S 57卒)
中村春華 (係長) (H 28卒)
(旧姓 石志)

藤井重隆 (課長) (H 8卒)
上野純弥 (係長) (H 28卒) (院 H 30卒)
西田雄輝 (R 2卒) (院 R 4卒)

村井裕樹 (係長) (H 8卒)
小柳文乃 (係長) (H 30卒)